

年報

第19号
(平成26年度)

特 集
過疎問題と寺院

智山教化センター

I 緒言	1
II 平成26年度教化年次テーマの推進 —————	4
A. 研修・講習会の開催	4
B. 平成26年度の教区教化研究会・ 檀信徒教化推進会議の開催テーマを振り返って	10
C. 智山教化センターが企画・編集を行った出版刊行物一覧	16
III 教化推進レポート 特集 過疎問題と寺院 —————	18
1. 大都市圏の寺院に過疎問題は関係ないのか	18
2. 人口減少社会と過疎問題へのあらたな視点	23
3. 地方から都市部に移り住んだ檀信徒に対する 他宗派の取り組みについて —浄土真宗本願寺派・浄土宗の事例—	28
IV 教化推進の展望 —————	33
・仏さまと出会う実践「阿字観」の新たな資材 「阿字観御本尊掛軸」について	33
・仏事がわかるリーフレットvol.1,2を発行して — 発行の経緯とその活用 —	35
・寺子屋交流会、青少年教化指導者養成講座からみる 青少年教化の展望	37
V 専門員レポート —————	40
・お寺を元気にする実践 — 正月護摩供法要の一試案 — ～伝法院開設講座「寺院活性化論」の講義から～	40
VI Essay File 教化年次テーマ「仏さまに祈る」 —————	42
・仏さまに祈る	42
・仏さまに祈る	43
VII その他 —————	44
・宗内寺院・教会刊行物 寄贈図書・資料 購入図書	44
・智山教化センターの役割と活動／智山教化センター構成員	裏表紙

I 緒言

～仏さまに祈る、そして仏さまと出会う～

智山教化センター センター長 片野 真省

はじめに

情報化社会といわれて久しい時代である。またデジタル社会という言葉が耳にしてから、もう随分と時は過ぎた感が強い。「時代に即応した教化」といわれることもあった。それは既成教団の体質を変えようとする呼びかけとも感じられたが、結局、既成教団に即応性という性質が備わっていないことを思い知らされるだけであった。そしていま、私たちが生きているこの時代は、相も変わらず情報化がさらに加速し、利便性を求める傾向に拍車がかかっているように思われる。

デジタルとアナログ。われわれ寺院、既成教団の体質はアナログであろう。むしろ宗教は、概ねアナログな世界を極めようとするものではないだろうか。アナログの極み。それが宗教、仏教の本質であり、しかしだからといって、真言密教の顕現される世界が、デジタル社会に後れを取るとか、色あせているなどという思い込みから、あわてる必要など全くないはずである。なぜなら現代人が持ち合わせる能力を最大限に引き出すためのノウハウを備えているのは、仏教、真言宗の世界であるのだ

から、私たちは泰然自若として、真言宗の素晴らしい教え、つまり無上甚深微妙の法が醸し出す世界に身を置いて、檀信徒を迎え入れればそれでいいと思うのである。

私たち真言行者が、真言密教の世界の素晴らしさを実感し、認識し直し、仏の救済力と迷える衆生を結びつける営みに終始すれば何もあわてる必要はない。仏さまに祈り、仏さまと出会う。檀信徒とともに、仏教を頼みとし、救われたいと強く願う衆生の声を聞き洩らさぬよう、寺院の空間で精進すれば何の不安を抱くこともないだろう。

① デジタルとアナログは両極端なのだろうか？

しかし、ひょっとするとデジタルとアナログは、双方が目指すところ、極めるところが同じ空間に至るのかも知れない。真言密教が顕現する世界観、つまり仏(曼荼羅)の世界は、デジタル社会が目指してしのぎを削る先にある空間を、すでに遙か昔にイメージし、顕現させてきた世界であったと解釈することもできるだろう。私たちが毎日観じている無上甚深微妙の教えを顕現した世

界、そのものを、いまのデジタル社会は追い求め、たどり着こうとして、終わりのなき日常をくり返している……とも考えられるだろう。

もし仮に、そうだとすれば「時代に即応する教化」とは一体何だったのだろうか？ そんな幻想が存在するかのようにして、宗団教化を推進しようとしても上手くいかないのは必然だったのかも知れない。現代社会が目指す理想型の行きつく先が、真言密教が構築する世界だとしたら、全くそれは『華嚴経』の善財童子の物語と似て非なることとなるのかも知れない。廣澤隆之前智山伝法院院長は、平成25年9月の愛宕薬師フォーラムで「大乘仏教はファンタジーの世界を顕現する」と語られた。そしてもうひとつ、現在の智山伝法院の前身である智山教化研究所で研究員をされ、昨年2月にご遷化された小山榮雅僧正は、別院真福寺の掲示伝道にこんな法語を遺している。「単に現象だけにとらわれて 毎日の生活を きゅうくつで苦しいものにしている 自分で怖い絵を描き それを見て怖れおのっている おろかな絵師のように」

デジタル社会の只中で、自身の価値を実感できず、浮き草のように漂っているのは、誰であろう真言行者と名のる私たちではなからうか。仏教、真言密教の世界を実感することができない、ちょっと古びた言葉でいうならアイデンティティを掴めない真言寺院の私たちは、その境内、堂内に長い時間をかけて先師が積み重ねてきた何にも代えがたい文化遺産ともいべき空間造形を伝えようとしなかったのであろう。つ

まり私たちこそが、寺院に起居する愚かな絵師と名のる者だったのではあるまいか。

② 葬式は要らない —突き付けられた世間の評価

本宗の現在の教化推進は、昭和46年に当時の真言宗智山派管長・総本山智積院化主、那須政隆猊下が呼びかけられた「つくしあい」運動を濫觴に、智山教化研究所、智山伝法院（教化研究室）、そして智山教化センターという流れを経て今日に至っている。5年毎に実施されてきた総合調査によるデータの分析研究と、智山伝法院が現在の教区教化研究会に先駆けて運営した「地方教化研究会」と教化研究室における「教化の基礎的研究会」での多岐にわたる議論の積み重ねから結実したものである。そうした地道なデータの分析と意見集約の下に、現在の教化目標と教化年次テーマがかたちづくられてきたのである。さらにその行きつく先が、「仏さまに祈る」「仏さまと出会う」。檀信徒と安らかなる心をともしする寺檀関係を構築することにつながるのである。

私たちがこの情報化の極まった現代社会において、仏教、真言密教の世界の素晴らしさを流布（情報発信）するための寺院活動の具体的実践的提案が現在の教化推進施策といえるだろう。仏とは何か？ この問いかけに私たち自身が自分の言葉で語り、自ら檀信徒とさまざまな教化活動をともし、安らかなる心を檀信徒と共有する。それにはまず寺門を潜ってもらい、ご本尊さまを

拜んでもらう。そのために仏さまと出会える環境を整えること。それが現代社会における寺院(菩提寺)の役割であるという揺るがない明確な意思を胸に刻むことでもある。

私たちは寺院住職として、寺に起居するものとして、ただそこにいないだけでは何の役にも立たないことになりかねない。自分で考え、自分で語り、自分で行動するためには、誰かの支えや、檀信徒と喜怒哀楽を共有しなければ、仏教の素晴らしい世界観を照らす法燈は、もう数十年、否、十数年で燃え尽きてしまうところまで来ている。寺院が廃れるのは、単に少子高齢社会でも人口減少社会でも過疎によるものだけではない。それは私たちが寺院に起居しているから、仏教、真言密教の世界を寺院の本堂及び境内に顕現しようと、法燈を絶やさずに赤々と照らすための精進を怠ってきたから、その理由に尽きる。世間の流れに唯々諾々として、すべてを責任転嫁してきたからである。それがいまや「葬式は要らない」と突き放され、「寺院は単なる風景の一部に過ぎない」と全うな評価をオウム真理教の幹部に下されたと思い知らされたのである。

むすび 一怠ることなく励もう！

仏とは何か？ この問いかけに応えようとしな。だから、「仏さまに祈る」「仏さまと出会う」という教化年次テーマにも他人事ですましてしまう。それが既成教団に属する寺院の体質すべてなのであろう。いま目の前に見えるこ

とにしか考えが及ばなければ、寺院と檀信徒の関係がどんどん薄まり、檀信徒の宗教意識はさらに失われ、寺院は廃れる運命にある。寺院がいまここで仏の慧眼を意識し、先を見通そうとする意思を持たなければこうした結末は明らかである。

その地域で、そこに住まう人々の心の支えとなり、生きる力を育むために寺院(菩提寺)は存在してきた。自身の中にある仏という可能性なり理想型。つまり生きがいの人にもたらしするために仏教は脈々と息づき、寺院の法燈は受け継がれてきた。その命題を担うために私たちは寺院に生まれ、寺院とのご縁に恵まれ、いまここに起居している。ご本尊さまと相対し、檀信徒の願いを受け止めて仏さまに祈り、檀信徒とともに仏さまと出会う機会を寺院に創生することが、私たちが生業とするところである。そして仏の世界を顕現させるため、仏と出会う喜びを味わってもらうために檀信徒教化を行うのである。だから私たちは仏に帰依して、両祖大師の弟子と名のるのである。釈尊以来、宗祖大師、中興興教大師の滲んだ想いをここで絶やすわけにはいかない。寺院の法燈をこれから先も、常しえに赤々と絶やさぬよう、怠ることなくともに励みたい。

II

平成26年度教化年次テーマの推進

仏さまに祈る

～智山勤行式、お仏壇、十善戒、発心式、青少幼年教化～

A.研修・講習会の開催

II

1

教師向けの研修会

智山総合研修会

本宗教師のさまざまな研鑽意欲に応えるために宗務庁が主催する分科会形式の研修会。
智山教化センターでは2つの分科会の企画・運営を担当した。

日 時：平成26年6月3日(火)～4日(水)
会 場：別院真福寺

第2分科会「あなたの教化は響いていますか？」 ～効果的な世代別教化方法を探る～

「世代別教化」に焦点を当て、自坊での教化活動が、より効果的に檀信徒に伝わるよう考察した。

講 師：内藤理恵子 氏（宗教学者）
松本紹圭 師（浄土真宗本願寺派布教師）
片野真省 智山教化センター長
司 会：磯山正邦 智山教化センター所員
参 加 者：44名



— 第2分科会 —

第5分科会『『十善戒』～現代日本においての 相応しい教化のかたちを探る～』

平成25年度・26年度の強調する教化活動の一つであった「十善戒」を取り上げ、十善戒の教化のあり方について参加者とともに考察した。

講 師：小笠原弘道 師（栃木南部教区 成就院住職）
阿部宏貴 師（智山伝法院教授）
高松宏寶 師（智山伝法院非常勤講師）
アドバイザー：小山龍雅 智山教化センター所員
司 会：松平實心 智山教化センター所員
参 加 者：24名



— 第5分科会 —

青少年教化指導者養成講座

青少年教化の具体的な活動提案である「寺子屋」の指導者養成を目的に、寺子屋の開催に必要な知識や実践方法を総合的に学ぶ機会とした。

日 時：平成26年6月20日(金)
 会 場：別院真福寺
 内 容：講義「寺子屋活動をはじめよう」
 実習「プチ寺子屋体験」
 講義「企画・安全対策・広報」
 講 師：福田照塔 師（成田山新勝寺教宣課）
 佐藤順興 師（埼玉第2教区 一乗院中）
 参 加 者：17名



— 青少年教化指導者養成講座 —

寺子屋交流会

青少年教化、特に寺子屋活動に携わる教師・寺庭婦人・寺族を対象に開催し、参加者同士の活動紹介やワークショップを通して交流を深め、各寺院での寺子屋活動の充実に役立てていただく機会とした。また、寺子屋活動に興味を抱く、教師・寺庭婦人・寺族にもオブザーバーとして参加していただき、活動プログラムや実践者の活動事例に触れていただく機会とした。

日 時：平成26年12月3日(水)
 会 場：別院真福寺
 内 容：教化センターによる寺子屋プログラムの提案
 ①「てぬぐいづくり」 ②「御守づくり」
 活動発表座談会「寺子屋活動を語ろう」
 講 師：佐藤雅晴 智山教化センター専門員
 福田照塔 師（成田山新勝寺教宣課）
 佐藤順興 師（埼玉第2教区 一乗院中）
 参 加 者：24名（うち未開催者15名）



— 寺子屋交流会 —

教化活動実践セミナー

教化活動の具体的な場面を想定し、その状況にあわせた実践研修を行って、体験的に学ぶことを目的としている。

教化活動は、その意義や方法を聞いただけではわからない部分があるため、体験学習を主体とした新しい研修形式として実修に主眼を置き、教化活動者の育成を目指している。

今回の実践セミナーは、参加対象を教師・寺庭婦人・檀信徒・遍照講員として、教師・寺庭婦人は、自坊での巡礼・遍路・団参に備えて先達としての指導方法を学ぶとともに総本山智積院を中心とする模擬団参コースを巡り、団参企画の一助とした。

檀信徒・遍照講員は、総本山智積院と西国霊場を巡拝すること、また、西国霊場の観音さまの前で稽古してきた御詠歌をお唱えすることのできるセミナーとして開催した。

日 時：平成26年10月29日(水)～31日(金)
テ ー マ：『総本山智積院から西国霊場の名利へ
～観音さまに会いに行こう～』

内容・講師：プログラムⅠ「御詠歌」

講 師：吉岡光雲 智山教化センター専門員
久野雅照 密厳流遍照講指導師範

プログラムⅡ「写経」

講 師：山川弘巳 智山教化センター所員

オプション「御詠歌の実修」・「法話」

講 師：御詠歌実修 吉岡光雲 智山教化センター専門員
法 話 松平實胤 智山教化センター専門員

講 義「教師・寺庭婦人への先達研修」

講 師：片野真省 智山教化センター長

巡 拝 寺 院：総本山智積院・西国三十三所観音霊場 7カ寺
(六波羅蜜寺、今熊野観音寺、三井寺、石山寺、
勝尾寺、中山寺、清水寺)

参 加 者：40名(うち、教師講習所教化応用科研修生2名)



— 教化活動実践セミナー —

愛宕薬師フォーラム

教師・寺庭婦人・檀信徒・一般の方々の知的好奇心に応えるため、仏教、さらには現代社会が抱える問題や社会現象などのさまざまなテーマで講演会を年4回開催した。

本年度も、別院真福寺を会場に各界の専門家による講演が行われた。参加者のより深い理解を促すべく、講演後には質疑応答の時間を設けた。

■第16回 平成26年5月26日(月)

テ ー マ：「空^{くう}」とはなんでしょう？

— 中観派の教えを学ぶ —

講 師：斎藤 明 先生(東京大学教授)

司 会：小山龍雅 智山教化センター所員

参 加 者：88名



— 斎藤 明 先生 —

■第17回 平成26年9月12日(金)

テ ー マ：「祈り～伊勢神宮と日本人」

講 師：入澤 肇 先生

(伊勢神宮崇敬会理事・神宮評議員)

司 会：磯山正邦 智山教化センター所員

参 加 者：42名



— 入澤 肇 先生 —

■第18回 平成26年12月5日(金)

テ ー マ:「魅力のある僧侶とは

～明恵上人の生涯と思想、夢の世界に学ぶ～」

講 師:奥田 勲 先生(聖心女子大学名誉教授)

司 会:元山憲寿 智山教化センター所員

参 加 者:79名



— 奥田 勲 先生 —

■第19回 平成27年2月4日(水)

テ ー マ:「ナラティブー人生の物語を語るということー」

講 師:川島みどり 先生(日本赤十字看護大学名誉教授
・健和会臨床看護学研究所長)

司 会:川口美保 智山教化センター所員

参 加 者:42名



— 川島みどり先生 —

4

檀信徒向けの研修会

檀信徒研修会(教化部企画運営協力)

全国の檀信徒が、信仰を深め、日々安らぎに満ちた生活を送っていただくことを目的として総本山智積院に集い、お釈迦さまやお大師さま、興教大師さまの教えを学ぶとともに、さまざまな宗教体験(智山勤行式、御詠歌、写経・写仏、阿字観など)を実修するために開催した。

第17回 檀信徒研修会

日 時:平成26年10月10日(木)～11日(金)

会 場:総本山智積院

テ ー マ:「お大師さまと真言宗智山派」(2年次カリキュラム)

参 加 者:119名

内容・講師:解 説「真言宗智山派と総本山智積院」

講 師:小笠原弘道 師(栃木南部教区 成就院住職)

実 修 1「写仏」

講 師:牧 宥恵 智山教化センター専門員

実 修 2「御詠歌」

講 師:滝吉照誉 密厳流遍照講指導師範
花木宋暢 密厳流遍照講指導師範

分 散 会「家庭の中の仏事」

上 演「御詠歌と布教で綴る『お大師さまのご生涯』(御詠歌オペラ)」

法 要「写仏奉納法要」



— 第17回檀信徒研修会 —
(御詠歌オペラ上演)

教区教化研究会・檀信徒教化推進会議 運営セミナー

今回の運営セミナーは、次の4つを大きな目的として教区長を対象に開催した。

- ① 平成27年度～28年度の教化年次テーマ「仏さまと出会う」への理解を深める
- ② 教区における教区長の役割を理解する
- ③ 教区教化研究会と檀信徒教化推進会議の必要性を知りその可能性を考える
- ④ 教区教化研究会と檀信徒教化推進会議の企画の立て方を具体的に学ぶ

日 時：平成27年3月16日(月)～17日(火)
 会 場：別院真福寺
 テー マ：「教区長の役割と教区教化研究会・
 檀信徒教化推進会議」

参 加 者：58教区59名

内容・講師：基調講演Ⅰ「教区教化研究会・
 檀信徒教化推進会議開催における教区長の役割について」
 講 師：芙蓉良英 総務部長

基調講演Ⅱ「教区における研修機会の重要性について」
 講 師：細川大憲 教学部長

基調講演Ⅲ「本宗の教化推進と教区教化研究会・檀信徒教化推進会議について」
 講 師：片野真省 智山教化センター長

教区教化研究会・檀信徒教化推進会議の開催事例

- ① 「東日本大震災を契機に企画した教区教化研究会
 平成26年度 東海教区・宮城教区の合同研究会」
 発 表 者：佐藤雅晴 宮城教区副教区長
 安部隆俊 東海教区教区長
 聞 き 手：鈴木芳謙 智山教化センター所員

- ② 「はじめて檀信徒教化推進会議を開催した事例
 平成25年度 平成26年度 東京南部教区檀信徒教化推進会議」
 発 表 者：田中定宏 東京南部教区前教区長
 聞 き 手：松平實心 智山教化センター所員

ガイダンス「研修会開催に関する事務の諸手続き」
 講 師：小峰誠昌 教宣課長

分 散 会「教区教化研究会・檀信徒教化推進会議を企画する」



— 運営セミナー —

第54回中央布教師会総会

中央布教師会は、各教区の布教師会会長が集い、年1回総会を開催している。その企画・運営に協力した。

日 時：平成26年4月24日(木)

内容・講師：基調講演「平成26年度教化推進施策について」

講師：近藤隆俊 教化部長

講演「安らかなる心をとともに」

講師：小宮一雄 宗務総長

法話実演「十善戒をテーマにした法話実演」

講師：岡野忠正 師（埼玉第2教区 金剛寺住職）

佐藤清隆 師（東京北部教区 長楽寺住職）

意見交換「講演・法話実演の講師3名への質問と意見交換」

第22回寺庭婦人連合会総会

寺庭婦人連合会は、各教区の寺庭婦人会会長が集い、年1回総会を開催している。その企画・運営に協力した。

日 時：平成26年10月1日(水)～2日(木)

会 場：総本山智積院

内容・講師：講演 1「平成26年度以降の教化推進施策について」

講師：近藤隆俊 教化部長

講演 2「仏事の大切さを伝える ―ご法事の意味―」

講師：片野真省 智山教化センター長

分散会「各教区活動報告と情報交換」

分散会書記 智山教化センター所員

実修「写経」東日本大震災 慰霊と復興に向けて

講師：鈴木芳謙 智山教化センター所員

全体会「各分散会座長より報告」

伝法院開設講座

智山伝法院は本宗の研究機関として、教育の一端を担うべく開設講座を開催し、教師・寺庭婦人などの学習の場を設けている。智山教化センターでは2講座を智山伝法院と共同企画した。

■阿字観指導者のための教理と実践

事相・教相・教化などさまざまな視点から毎回違った先生に阿字観についてのご講義をいただき、その後、阿字観の実修を行うことで、指導者としての知識や経験を積んで、阿字観道場の開設を目指す場とした。

■寺院活性化論 一檀信徒と共に寺院を元気にするために

檀信徒が、安らかなる心を体得するために寺院でどのように活動すればよいのか。教化目標「生きる力―安らかなる心をとともに」の実現に向け本宗が推奨している教化活動の実践について講義と実修を中心に研修した。



阿字観指導者のための教理と実践



寺院活性化論 一檀信徒と共に寺院を元気にするために

B.平成26年度の教区教化研究会・ 檀信徒教化推進会議の開催テーマを振り返って

智山教化センター所員 松平實心

はじめに

グローバル化、情報の氾濫、少子高齢化……。近年、私たちを取り巻く社会情勢は目まぐるしく変化し、また同様に、人々の意識や価値観も一段と多様化している。

こうした状況の変化は、本宗のあり方をも例外なく転換し更新することを要求する。本宗も、一般の社会に属し、そして檀信徒に支えられて存在している以上は当然であり、それは、今の時代に限定されるものでもない。

さて、本宗では、「教区教化研究会」と「檀信徒教化推進会議」という2つの研修会を設定し開催を支援している。前者は、寺院教会の活性化に向け、教区内教師が自らが対面するさまざまな問題から、自由にテーマを設定し、研修そして意見交換を通じて、教化の実践方法や寺院活動を学ぶ場であり、後者は、教区の教師・寺庭婦人・檀信徒が協力して、教化活動や行事の場を設け、宗教的感動を体験し、真言宗智山派の檀信徒として信心を育み深めていく場である。

平成26年度に開催された「教区教化研究会」・「檀信徒教化推進会議」を概観してみると、従来のようなテーマでの研鑽のみならず、社会情勢の変化にも対応した教化の方策が模索されつつあることがわかる。これらを踏まえて、平成26年度に開催された両研修会の事例を数例取り上げて、宗団・教区の教化の動向を紹介したい。

教区教化研究会について

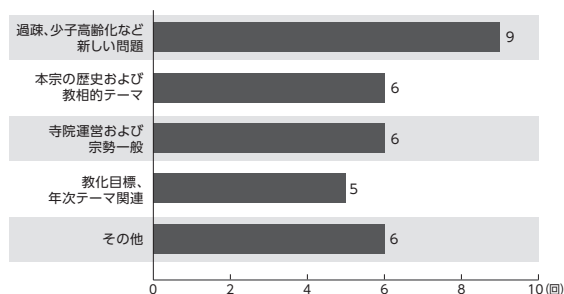
現代的な問題をテーマとした事例

平成26年度は、32件開催のうち、過疎、少子高齢化、墓地・永代供養墓等といったこれまで開催されることが少なかったテーマが最も多く、開催テーマの1/3弱を占めた。

過疎、少子高齢化の地域にあって、寺院をどのようにして維持していくか、そしてまた、変化しつつある宗教意識、寺離れの叫ばれる時代にあって、葬儀や墓に対する人々の意識も変化しており、そうした状況において、寺檀関係をどのように保っていくかということに、腐心している様子がうかがえる。

特に、過疎問題を主に取り上げた下総匝瑳教区（千葉県）、上総第4教区（千葉県）、佐渡教区（新潟県）の三教区は、過疎地域に存在する寺院数が多く、千葉県が95カ寺で最多、ついで新潟県が74カ寺であ

教区教化研究会開催テーマ事例



り、まさに喫緊の課題であることがわかる。（本宗寺院の都道府県別の過疎化率は、『年報』第18号 P.31 図表 7：智山派寺院の都道府県別過疎化率を参照）

他と一線を画す内容の事例

宮城教区と東海教区は合同で、「防災を通しての檀信徒教化」というテーマで開催した。東日本大震災発生より3年以上が経ち、東海教区が宮城教区へ、慰霊、視察および災害時における寺院・教師のあり方を学ぶことを目的に出張して行われた。今後発生する可能性の高いといわれる東南海地震に備えての情報共有という点、および、規模が大きく、かつ距離の離れた2つの教区の合同開催という点で、これまでにあまりみられなかった事例といえるだろう。

檀信徒教化推進会議について

一方で檀信徒教化推進会議は35件開催された。テーマとして取り上げられたものの大半が、平成26年度の教化年次テーマである「仏さまに祈る」と、そのもとで設定されている強調する教化活動についてである。しかし、研修の形式は多岐にわたっている。

五感に訴えかける教化活動

その中で特徴的なものとして、①絵解き ②大本山・別格本山等への団参 ③御詠歌オペラ ④結縁灌頂があげられる。①～④に共通するのは、数ある教化活動のうちでも、仏の世界を五感をとおして体得させる教化活動ということである。

つまり、①の絵解きは、長野北部教区長谷寺の寺庭婦人である岡澤恭子氏による涅槃図の絵解きであり、視覚と聴覚に直接訴えかけるものである。②は、名利という仏さまの空間を訪れて身体全体で仏の世界を感じる。そして③は、本宗で平成25年度より開催を呼びかけている教化活動であり、宗祖弘法大師の教えを御詠歌、声明、法話、そして映像によって表現したもので、これも①同様、複数の感覚器官に訴えかけるものであり、仏さまの世界を身体で理解することができる。そして極めつけは④であり、これは荘厳された道場で、戒を授かり、仏さまと縁を結ぶという真言宗最高の檀信徒教化である。

五感に直接訴えかけるこれらの宗教活動は、宗教的感動を得やすいという点で、檀信徒教化推進会議の趣旨に合致するものであり、その意味で、今後も多くの教区で取り上げられることが予想される。



京阪教区の檀信徒教化推進会議（御詠歌オペラ）の様子

結 び

以上、平成26年度に開催された教区教化研究会および檀信徒推進会議の中から何例か取り上げて振り返った。教区教化研究会からは、その地域性、経済性など諸条件によって違いはあるものの、目の前の危機として寺檀関係のあり方を危惧する状況がみとれる。檀信徒教化推進会議からは、いかに檀信徒に仏さまの、真言宗の世界を体感してもらい、寺檀関係の維持強化を図るかという工夫が読み取れる。

いずれにせよ、目まぐるしく変わりつつある社会情勢に対して宗団・教区は試行錯誤して真摯に取り組むほかないようである。

平成26年度 教区教化研究会 開催一覧

教 区	日 時	会 場	参加人数	形 式	講 師	テーマ
岩手	4月23日	エヴァホール大東	24名	講演会→質疑応答 →意見交換	山川弘巳 センター所員	教化活動の周辺にある諸問題
下総匠瑳	4月26日	薬師寺	34名	講演会→質疑応答 →意見交換	近藤隆俊 教化部長	過疎化が進み世代交代による 寺檀関係のあり方
栃木中央	5月15日	成願寺	36名	講演会→質疑応答 →意見交換	廣澤隆之 大正大学副学長	弘法大師の文字観 ー声字実相義を中心としてー
長野北部	5月21日	ささや	49名	講演会→質疑応答 →意見交換	片野真省 センター長	『社会における寺院として自覚』 PART3「葬儀・墓地の諸問題」
茨城1	5月21日	水戸プラザホテル	22名	講演会→質疑応答 →意見交換	長澤宏昌 日蓮宗 遠妙寺住職	散骨はすべきではない
埼玉2	5月26日	ホテルメトロポリタン	40名	講演会→質疑応答 →意見交換	吉田宏哲 師	「真言教師の安心論 ～現代社会の中で真言教師としての アイデンティティ」
埼玉4	5月31日	レストラン むさし	35名	講演会→質疑応答 →意見交換	埼玉県総務部 学事課宗教法人担当 主査 高橋正浩 氏 主任 清野博孝 氏	宗教法人の管理運営 (事務所備付け書類及び所轄庁 報告書類について)
新潟3	6月6日	長岡ターミナルホテル	24名	講演会→質疑応答 →意見交換	小笠原弘道 師	総本山智積院史 III
上総4	6月19日	勝覚寺	24名	講演会→質疑応答 →意見交換	高岡邦祐 センター所員 馬渡竜彦 師 日蓮宗過疎地域寺院 活性化検討委員会委員	少子化・過疎化、寺院離れの時代、 いかにして寺檀関係を保っていくか
宮城・東海	6月24日	秋保温泉 岩沼屋	52名	事例報告 →全体討論	長谷川実彰 師 佐藤雅晴 センター専門員	防災を通しての檀信徒教化
安房1	6月28日	那古寺	23名	講演会→質疑応答 →意見交換	①近藤隆俊 教化部長 ②倉松隆嗣 センター所員	①智山派の現状について(宗勢一般) ②教化年次テーマについて リーフレットの活用
北海道	7月4日	旭川トーヨーホテル	18名	講演会→質疑応答 →意見交換	岡野忠正 師	仏さまに祈る
佐渡	7月26日	胎蔵寺	27名	寺子屋 お寺での実践体験	佐渡教区教師 及び寺庭婦人	お寺に親しもう
埼玉1	9月5日	薬林寺	19名	講演会→質疑応答 →意見交換	司東和光 師	仏さまに祈る 祈りの形～信は行にあり
埼玉4	9月17日	真言宗智山派宗務庁	19名	講演会→質疑応答	小宮一雄 宗務総長	総本山智積院及び 真言宗智山派の現状と展望
新潟2	9月29日	割烹旅館 公楽	19名	基調講演→分科会 →全体討論	鈴木晋伶 伝法院副院長	これからの寺院運営について
奥羽	9月29日	アリベの森いわき荘	14名	講演会→質疑応答 →意見交換	①原 豊壽 センター専門員 ②漆原照隆 師	口説布教の技術向上のために

Ⅱ

平成二十六年 度教化年次テーマの推進

教 区	日 時	会 場	参加人数	形 式	講 師	テ ー マ
佐 渡	10月5日	普賢寺会館	17名	事例報告 →全体討論	高岡邦祐 センター所員	真言宗智山派寺院の 現状把握と寺院の活性化
栃木南部	10月10日	ホテルサンルート栃木	17名	事例報告 →全体討論	倉松俊弘 センター専門員	「永代供養を考える」 ～変化する葬送儀礼から学ぶ(2)～
山形村山	10月19日	地藏寺	15名	講演会→質疑応答 →意見交換	①近藤隆俊 教化部長 ②青木弘全 災害対策室長	①「宗勢一般」の理解 ②「現代社会と仏教～東日本大震災への 本派の取り組みを踏まえて」
埼玉7	11月3日	山梨県甲府近隣寺院	11名	巡拝	井桁浄継 師 新井尚義 師	巡礼先達の心得及び 参拝寺院の見どころ
東京北部	11月4日	別院 真福寺	15名	講演会→質疑応答 →意見交換	村磯栄俊 師	『智山年表』編纂の経緯と問題点
新潟1	11月10日	ホテルサンルート新潟	18名	講義→意見交換	片野真省 センター長 補助員 塩地義法 教師講習所教化専門科 センター実修コース受講生	生きる力-安らかなる心をともに- 仏さまに祈る 「葬儀・法事・祈祷の役割」について
安房2	11月10日	総持寺 客殿	17名	講演会→質疑応答 →意見交換	杉本栄次 総務部総務第1課長	「寺院運営上の諸問題について」 様々な事例を通してその解決策を考える
東京南部	11月11日	別院 真福寺	15名	講演会→質疑応答 →意見交換	本多隆仁 大正大学教授	冬報恩講論題解説
福島3	11月25日	磐梯熱海・花の湯	11名	講演会→質疑応答 →意見交換	高牧 康 氏	御詠歌や読経の もうひとつの効果を学ぶ
安房4	11月26日	山荘	11名	講演会→質疑応答 →意見交換	金本拓士 伝法院教授	盆行事における習俗について
下総印旛	11月26日	大本山成田山新勝寺	32名	講演会→質疑応答 →意見交換	阿部宏貴 伝法院教授	寺院子弟における伝統教育の歴史
安房3	11月26日	圓蔵院	19名	その他	尾角光美 氏 社団法人リヴオン代表理事	自死(自殺)について
東京東部	2月19日	浅草ビューホテル	約20名	講演会→質疑応答 →意見交換	薄井秀夫 氏 懶寺院デザイン 代表取締役	「伝える」を考える -新たな信頼関係の構築-
愛媛	2月20日	東京第一ホテル松山	約30名	講演会→質疑応答 →意見交換	関 義央 伝法院常勤研究員	墓地にまつわる 現代の諸問題について
長野南部	3月4日	上諏訪温泉「ぬのはん」	約30名	講演会→質疑応答 →意見交換	磯山正邦 センター所員	墓地にまつわる現代の諸問題

計32回 31教区開催 ※「講師」の肩書きは開催当時のもの ※報告書(報告書未提出の場合は開催届)に基づき作成

平成26年度 檀信徒教化推進会議 開催一覧

教 区	日 時	会 場	参加人数	形 式	講 師	テーマ
埼玉 10.11.12	5月21日	川越プリンスホテル	338名	その他	佐藤玲秀 師	仏さまに祈る
東京多摩	5月28日	別格本山 高幡山金剛寺	216名	講演会	萩原次晴 氏 元スキーノルディック複合 日本代表・スポーツキャスター	次に晴ればそれでいい
佐渡	6月6日	トキの村元気館	95名	講演会→質疑応答 →意見交換	上村正健 師	智山宝暦についての解説
福島2	6月7日	浄光寺	120名	講演会→質疑応答 →意見交換	長野北部教区 長谷寺 寺庭 岡澤恭子 氏	仏さまに祈る 釈迦涅槃図絵解き
栃木中央	6月13日	持宝院	105名	講演会→ 御詠歌実習	相川孝丞 師	お大師さまに集う
東京北部	6月13日	三寶寺	100名	講演会	佐藤清隆 師	仏さまに祈る
安房2	6月19日	大本山成田山新勝寺 大本山川崎大師平間寺	73名	参拝と山内視察	大本山川崎大師御貫首 藤田隆乗 師 大本山成田山新勝寺長 山崎照義 師	関東三大本山を参拝・視察する
上総1	6月25日	かん七	82名	講演会→質疑応答 →意見交換	加藤義昭 師	仏さまに祈る ー追善回向の解説
安房1	6月29日	たてやま 夕日海岸ホテル	175名	講演会→質疑応答 →意見交換	①近藤隆俊 教化部長 ②倉松隆嗣 センター所員	①菩提寺と真言宗智山派 ②真言宗智山派の教えについて (今年度年次テーマを中心に)
安房3	6月29日	圓蔵院	149名	その他	渡辺有真 師 川名芳蓮 師	仏さまに祈る: 勤行式の唱え方・仏教に呼吸法
新潟1	7月3日	ホテル清風苑	86名	講演会→質疑応答 →意見交換	倉松隆嗣 センター所員	生きる力ー安らかなる心をとともにー 仏さまに祈る 「葬儀、法事、祈祷の役割」について
栃木北部	7月4日	ホテルニュー塩原	150名	講演会→質疑応答 →意見交換	石川照貴 講伝所所員	真言宗の葬儀の特徴と 意義について
新潟3	7月5日	メモリーナ中央葬苑桶忠	70名	その他	横川恵子 氏	新潟に残るごぜ唄を聴く
福島1	7月5日	新舞子ハイツ	136名	講演→写仏実修	牧 有恵 センター専門員	写仏 (震災物故者・各家先祖供養)
新潟2	7月11日	割烹旅館 公衆	117名	講演会→質疑応答 →意見交換	佐藤英順 センター所員	「仏さまに祈る」(青少年教化) ー仏の子としての心を育てるー
栃木中央	9月29日	宇都宮市文化会館	490名	講演会・ 御詠歌オペラ	松本弘元 師	お大師さまに集う
東京南部	10月3日	大田区民プラザ	228名	その他	海老塚和秀 師	檀信徒つどいのひろば 「同行二人ーいつもそばにいるよー」
安房1	10月4日	たてやま 夕日海岸ホテル	103名	講演会→質疑応答 →意見交換	大谷由香 氏 龍谷大学・花園大学 非常勤講師	各寺院檀家、 特に婦人に対する 教化推進を実施する

Ⅱ

平成二十六年年度教化年次テーマの推進

教 区	日 時	会 場	参加人数	形 式	講 師	テ ー マ
埼玉4.5.6	10月8日	春日部市民文化会館	431名	記載なし	①近藤隆俊 教化部長 ②増田明美 氏	仏さまに祈る
下総海銚	10月17日	黄鶴	100名	講演会→質疑応答 →意見交換	松平實胤 センター専門員	仏さまに祈る
長野北部	10月17日	上田東急イン	83名	講演会	三遊亭吉窓師匠・ 立川談幸師匠	古典芸能から「信仰と祈り」を学ぶ
上総3	10月17日	大本山護国寺 高岩寺	122名	記載なし	加藤快雄 師 山口照明 師	仏さまを拝む
山形村山	10月19日	地藏院	80名	講演会→質疑応答 →意見交換	①近藤隆俊 教化部長 ②青木弘全 災害対策室長	①宗勢一般 ②東日本大震災への本派の取り組み
埼玉7.8.9	10月29日	皆野町文化会館	329名	講演会→質疑応答 →意見交換	小宮一雄 宗務総長 別格本山 高幡山金剛寺御貫主 川澄祐勝 師	仏さまに祈る
山梨	11月1日	別格本山 高幡山金剛寺	93名	法話	別格本山 高幡山金剛寺御貫主 川澄祐勝 師	御貫主さまのご法話拝聴
高知	11月3日	竹林寺本堂・客殿	334名	結縁灌頂	真言宗智山派管長 寺田信秀 祝下	第5回「いのち」
上総4	11月4日	大本山成田山新勝寺	135名	参拝	なし	大本山成田山新勝寺参拝
京阪	11月6日	宗務庁 ハイアットリージェンシー	108名	御詠歌オペラ、法話、 月輪観	法話 藤井龍定 師 月輪観 中野泰倫 師	布教と体験による教化活動
宮城	11月10日	宮城蔵王ロイヤルホテル	102名	講演会	佐々木大樹 伝法院常勤講師	「智山勤行式」は心の糧 －祈りの尊さを理解しよう－
岩手	11月16日	長谷山観音寺	136名	基調講演→分科会 →全体討論	福田亮雄 師	「祈りの道を行く」 気仙三十三観音札所徒歩巡り
埼玉1	11月21日	川口駅前市民ホール フレンディア	208名	絵解き	長野北部教区 長谷寺 寺庭 岡澤恭子 氏	第六回真言の集い －仏さまに祈る
栃木南部	11月26日	大本山川崎大師平間寺	125名	記載なし	佐藤隆一 伝法院客員講師	お大師様と祈り
福島第3	11月26日	郡山あおき斎苑	81名	講演会→質疑応答 →意見交換	高牧 康 氏	御詠歌や読経のもうひとつの 効果を学ぶ
長野南部	12月2日	ホテルブエナビスタ	100名	講演会→質疑応答 →意見交換	茅野俊幸 師 曹洞宗 瑞松寺住職	『身と心は縁によって成り立つ』 東北に寄り添って
埼玉2	3月9日	成田山東京別院 深川不動堂	90名	その他	なし	仏さまと出会う

計35回 39教区開催 ※「講師」の肩書きは開催当時のもの ※報告書(報告書未提出の場合は開催届)に基づき作成

C. 智山教化センターが企画・編集を行った 出版刊行物一覧

① 生きる力SHINGON 檀信徒の「生きる力」を育む仏教総合教化誌

- 第77号** | 平成26年6月1日発行 **頒布数108,432部**
特集 ご先祖さまに祈り、自分を振り返るお盆
— 東日本大震災をとおして知るお盆 —
- 第78号** | 平成26年9月1日発行 **頒布数53,963部**
特集 子どもの行事と寺院のかかわり
- 第79号** | 平成26年12月1日発行 **頒布数84,628部**
特集 般若心経と祈り
- 第80号** | 平成27年3月1日発行 **頒布数54,153部**
特集 お彼岸とご先祖さまとお仏壇



② 智山ジャーナル 智山派教師の自己研鑽と資質向上を目指す専門誌

- 第69号** | 平成26年6月1日発行
特集 富士山信仰
- 第70号** | 平成26年8月1日発行
特集 学山智山の礎 — 運敵僧正誕生400年 —
- 第71号** | 平成26年11月1日発行
特集 寺院とネット社会
- 第72号** | 平成27年2月1日発行
特集 御札、御守考



③ 教化年次テーマ啓発ポスター

教化年次テーマ
「仏さまに祈る」



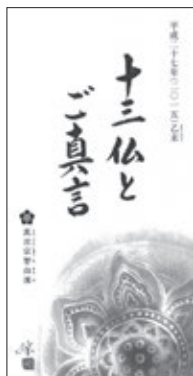
④ ポスターカレンダー

檀信徒頒布用B2判カレンダー 1部100円
頒布数19,935部



⑤ 柱掛けカレンダー「十三仏とご真言」

檀信徒頒布用カレンダー
1部100円
頒布数107,712部



⑥ 檀信徒研修会ポスター

総本山智積院開催の
檀信徒研修会参加推奨のポスター



⑦ 寺子屋かわらばん Vol.4

寺子屋活動に関する
本宗寺院の交流誌



⑧ あ 子字の子リーフレット vol.1

青少幼年に向けた
仏教情操リーフレット



〔平成27年3月31日発行
頒布は、4月1日より開始〕

⑨ 年報18号

智山教化センターの
1年の活動を報告



⑩ 阿字観御本尊掛軸

真言宗の瞑想法である
阿字観・月輪観を行う際の
御本尊
掛軸 27,000円
掛軸立て 3,000円



〔平成27年3月31日発行
頒布は、4月1日より開始〕

※頒布数は平成27年3月31日現在

III 教化推進レポート

特集 過疎問題と寺院

1 大都市圏の寺院に過疎問題は関係ないのか

智山教化センター所員 鈴木芳謙

はじめに

昨年度『年報』第18号の教化推進レポート「本宗（寺院）の過疎化の現況は、どうなっているのか？」では、都道府県別・ブロック別などを含めて本宗の過疎化率を算出し、現状把握を試みた。その結果いくつかの現状がみえてきた。

「過疎問題」というと、人口が減少する「地方の問題」という認識をもっている方も少なくないだろう。しかし人口が流入、増加し続けている大都市圏、そこに所在する寺院に過疎問題は関係ないことなのだろうか。

本レポートでは、過疎問題が大都市圏とそこに所在する寺院にどのようにかかわっているのか、いくつかの角度から垣間みたいと思う。

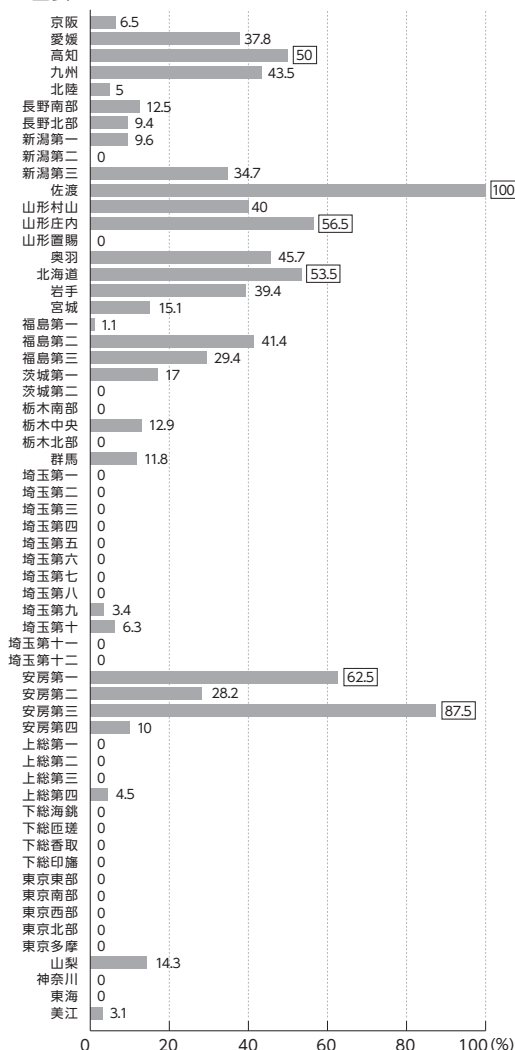
1. 教区別の過疎化率と大都市圏の寺院

まず、昨年度の『年報』第18号で触れることができなかった本宗の行政区割りである教区単位での過疎化の現況をみていくことにしたい。本宗の行政区である各教区に存在する過疎地域寺院数^{*1}、教区内の全寺院数と過疎地域寺院数とを比較した各教区の過疎の割合（過疎化率）を表したのが【図表1】になる。そして、その過疎化率をグラフにしたものが【図表2】になる。過疎化率が50%を超す教区は、佐渡教区（100%）、安房第三教区（87.5%）、

図表1: 各教区の過疎地域寺院数と割合

教区	寺院数	過疎地域寺院数	過疎化率(%)
京阪	62	4	6.5
愛媛	37	14	37.8
高知	22	11	50
九州	46	20	43.5
北陸	20	1	5
長野南部	48	6	12.5
長野北部	106	10	9.4
新潟第一	52	5	9.6
新潟第二	40	0	0
新潟第三	49	17	34.7
佐渡	52	52	100
山形村山	45	18	40
山形庄内	23	13	56.5
山形置賜	10	0	0
奥羽	35	16	45.7
北海道	43	23	53.5
岩手	33	13	39.4
宮城	93	14	15.1
福島第一	89	1	1.1
福島第二	29	12	41.4
福島第三	34	10	29.4
茨城第一	47	8	17
茨城第二	50	0	0
栃木南部	45	0	0
栃木中央	93	12	12.9
栃木北部	37	0	0
群馬	17	2	11.8
埼玉第一	49	0	0
埼玉第二	56	0	0
埼玉第三	52	0	0
埼玉第四	55	0	0
埼玉第五	49	0	0
埼玉第六	54	0	0
埼玉第七	47	0	0
埼玉第八	48	0	0
埼玉第九	58	2	3.4
埼玉第十	48	3	6.3
埼玉第十一	46	0	0
埼玉第十二	42	0	0
安房第一	56	35	62.5
安房第二	39	11	28.2
安房第三	48	42	87.5
安房第四	40	4	10
上総第一	47	0	0
上総第二	28	0	0
上総第三	80	0	0
上総第四	66	3	4.5
下総海鏡	63	0	0
下総匝瑳	67	0	0
下総香取	59	0	0
下総印旛	33	0	0
東京東部	37	0	0
東京南部	38	0	0
東京西部	27	0	0
東京北部	42	0	0
東京多摩	55	0	0
山梨	35	5	14.3
神奈川	45	0	0
東海	105	0	0
美江	32	1	3.1
合計	2,903	388	13.4

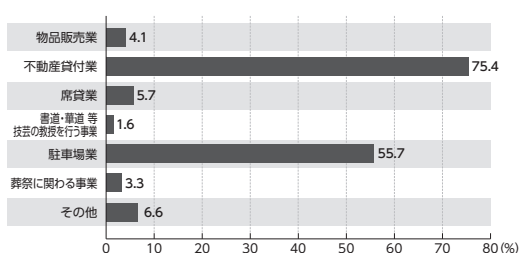
図表2: 教区別過疎率



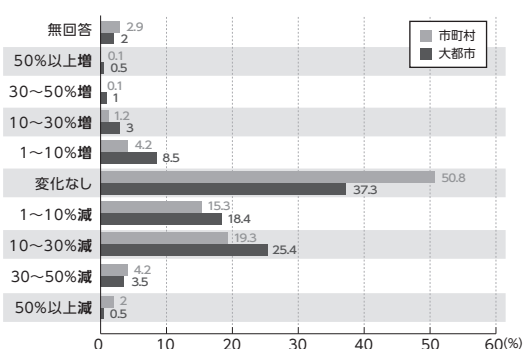
安房第一教区 (62.5%)、山形庄内 (56.5%)、北海道教区 (53.5%)、高知教区 (50.0%) の6教区になる。一方で過疎化率が0%の教区も全60教区のおよそ半分の29教区ある。当然、過疎化率0%の教区には、大都市に所在する教区が多くあることが容易に推測できるだろう。

次に、大都市の本宗寺院について、平成22年度本宗総合調査を頼りにみていくことにする。調査によると、「大都市」*2に所在する本宗寺院は201カ寺で、割合としては、全体の8.8%になる。大都市に所在する寺院は、<東京ブロック>に集中しており、その割合は総合調査で「大都市に所在する」と回答した総数の60.8%にも及んでいる。

図表3: 収益事業の内容 (大都市・寺院・複数回答)



図表4: 年間総収入の変化 (寺院・過去5年)

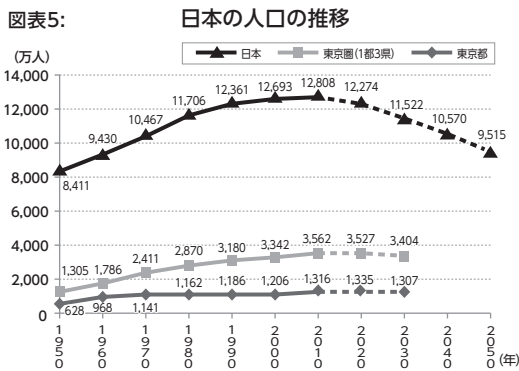


兼務寺院の割合を「大都市」・「市町村」*3の地域で比較すると、それぞれ11.4%・37.6%で、「大都市」の9割弱が正住寺院である。また「大都市」では、年間総収入が1000万円を超える寺院が6割弱となっている。そして「大都市」の寺院では、収益事業を行っている割合が60.7%と半数を超えていて、「市町村」の7.9%に比べると、いかにその割合が高いかがわかる。その収益事業の内容は、不動産貸付業、駐車場が上位を占めている【図表3】。また「大都市」の収入源1位が、収益事業となっている割合は「市町村」に比べると10倍以上もある。このことから「大都市」の寺院は、「市町村」の寺院に比べ布施収入の依存度が低いと読みとることができる。しかし、収益事業が社会情勢に影響を受けるためか、年間総収入の増減は「大都市」の方が変化の割合が大きくなっている【図表4】。

2. 大都市圏の動向と取り巻く環境

今後の大都市圏の動向が、どのように推測されているのか。ここでは、大都市圏でも本宗寺院の所在が多い東京圏の都心を中心に動向の一端をみていくことにする。

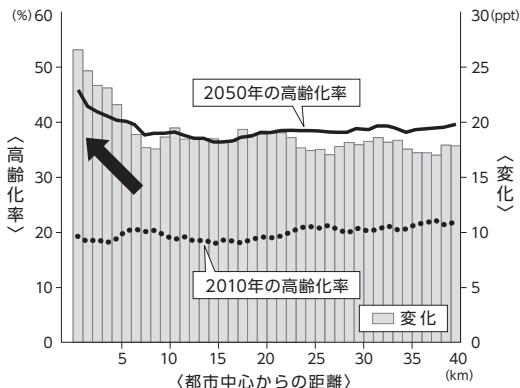
【図表5】のように、東京圏の人口は5年後の2020年から減少に転じるとされている。また2010-2040年の高齢者の増加率をみると、高い順に沖縄県・神奈川県・東京都・埼玉県・愛知県となっていて【図表6】、大都市圏でも特に東京圏での高齢者の増加率が高く、2020年には4人に1人が高齢者になると推測されている。これは、いわゆる団塊世代といわれる人口ボリュームの大きい世代(1944-49年生)の人々が、2012年から65歳の高齢者となったことが要因とされ、2012年の1年間で千葉



図表6: 65歳以上人口の増加率(2010年→2040年)

		増加指数 (2010年=100)	増加人口とそのシェア (1,000人、%)	2040年人口 シェア
1	沖縄	171.3	172 (1.9)	(1.3)
2	神奈川	159.5	1,089 (11.8)	(7.8)
3	東京	153.7	1,439 (15.7)	(11.5)
4	埼玉	149.7	732 (8.0)	(5.9)
5	愛知	147.4	713 (7.8)	(6.4)
6	滋賀	147.0	137 (1.5)	(1.2)
7	千葉	146.1	617 (6.7)	(5.0)
8	福岡	136.5	414 (4.5)	(4.1)
9	宮城	136.3	191 (2.1)	(1.8)
10	大阪	135.3	700 (7.6)	(6.9)

図表7: 東京圏の距離帯による高齢化率とその変化(2010年→2050年)



県や埼玉県では、高齢化率をおよそ5%も引き上げた。これらを背景に、年金などを始め、社会保障の負担増がいわれ始めている。

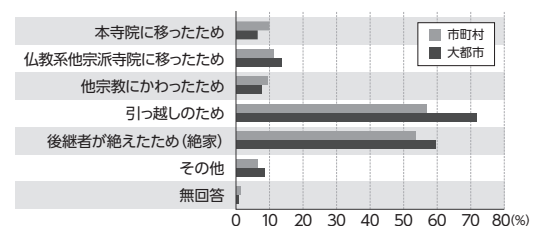
ここで東京圏の都心からの距離帯^{*4}による高齢者の増加・高齢化率の変化をみると、2050年に距離帯によっては、高齢化率45%という予測もあり【図表7】、今後、東京圏の都心といえども限界集落化^{*5}の可能性が潜んでいる。併せて、本宗寺院の多い名古屋圏にも目を向けると、中心地からの距離が近いほど高齢者の増加率が高くなるという東京圏と同様の傾向が予測されている。この高齢化率を押し上げている一因に、出生率の低さが指摘されることが多い。次に、出生率に関して高齢化率のときと同じように都心からの距離帯による報告が【図表8】になる。これを裏付けるように、昨年、日本創成会議が発表した将来予測では、2040年に「消滅可能性都市」として挙げられた全国896の自治体の中には東京都の豊島区が入っている。これらのことから、人口が集中してきた大都市圏の都心といえどもそう遠くない将来、決して安閑としていられなくなる時代がくるだろう。

ここで再度、平成22年度本宗総合調査を紐解き、大都市の寺院を取り巻く環境の一部を挙げておきたい。その調査項目の中の「離檀の理由」に着目すると、「引っ越しのため」、「後継者が絶えたため(絶家)」の割合は、「市町村」より「大都市」の方が高い数値を示している【図表9】。

図表8: 東京圏の距離帯による子ども女性比^{*6}(2010年→2040年の見通し)

距離帯(km)	0~5	5~10	10~15	15~20	20~25	25~30	30~35	35~40
距離対平均の子どもの女性比	0.86	1.01	1.20	1.27	1.24	1.28	1.27	1.29

図表9: 離檀の理由(寺院・複数回答)



3. 宗教意識の変容と信仰の過疎

物理的な外的要因で、人口が減少していくことを過疎とするならば、内的要因として宗教意識が変容し、宗教的文化伝達（信仰の継承）がなされず、信仰心がやせ細っていくことを「信仰の過疎」とも表現できるだろう。これまで「過疎」について社会動向などの物理的な外的要因をみたが、ここでは寺院にかかわる過疎の内的要因としての宗教意識についてみていきたい。

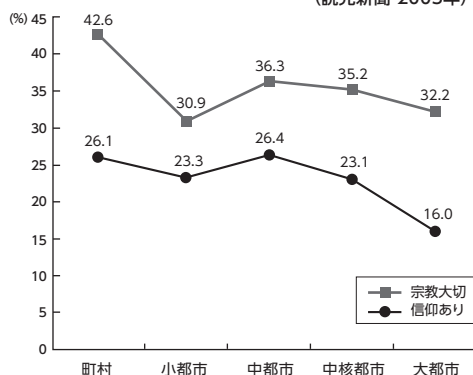
すでに都市規模や地域別の信仰心にかかわる調査が、各種研究機関などで行われている【図表10・11】。これらのデータからも、都市部ほど信仰心や宗教が大切とする人の割合は低い傾向があることがみてとれる。このことに関連づけられるだろう傾向を、平成22年度の本宗総合調査からもみることができる。【図表12】は、地域と意識をクロスしたもののだが、他の地域よりも「大都市」での家族葬や直葬の割合が多くなっていることを把握でき、大都市部で葬送儀礼の変化が確実に起こっていることがわかる。また読売新聞の意識調査では、自分の葬儀に関して39.1%の人が「無宗教の葬式にしてほしい」と答えている。

信仰の過疎化は、社会情勢や宗教意識の変容などにより、墓地の問題や葬儀の問題とも複雑に絡み合ってくる問題であろう。信仰の

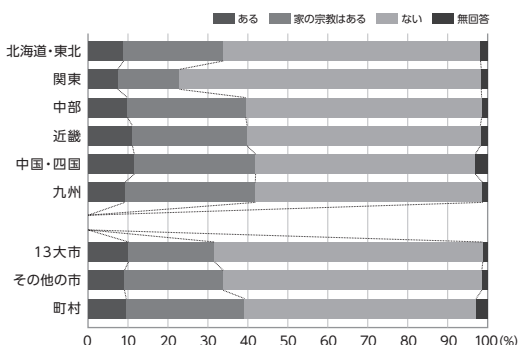
過疎化が進まないために、檀信徒と寺院との紐帯をどう結んだらよいのか。そこで1つのキープポイントになると考えられるのが、次世代の檀信徒への宗教的文化伝達（信仰継承）をいかにすべきかである。

では、そのヒントを探るため、國學院大學

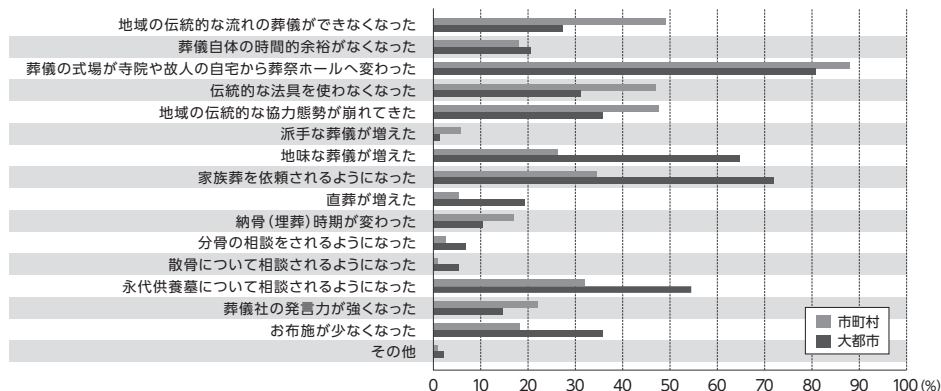
図表10: 信仰あり・宗教大切・都市規模別
(読売新聞 2005年)



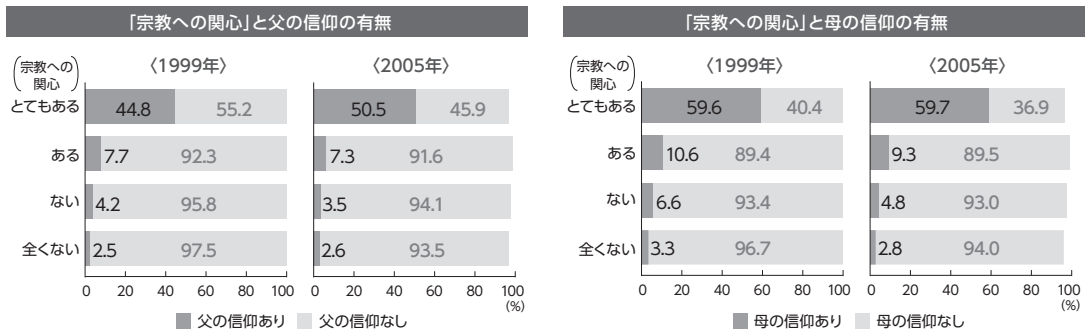
図表11: 現代日本人の信仰の有無・地域別・市郡別



図表12: 葬儀の変化内容 (寺院・複数回答)



図表13: 両親の信仰の有無と子どもの宗教意識



の調査報告書『若者における変わる宗教意識と変わらぬ宗教意識』を手がかりにみてみよう。その調査では「両親の信仰の有無と、子どもの宗教への関心度合い」について尋ねた設問があり、1999年と2005年の調査結果が【図13】である。このように信仰に関して、そこには親子の強い相関関係が働くことが理解できる。

家族社会学を専門とし、主として宗教と家族のつながりについて多くの研究・著書のある森岡清美氏は、「家庭における宗教的なしつけも子どもの信仰に影響があるが、そこに教団組織によって行われた意図的な「宗教教育」の経験が加わると信仰を継承する方向に相乗的な効果をあげている」と指摘している。このことから寺子屋を始めとする青少年教化などから、「信仰の過疎」への取り組みの糸口が探れる可能性もあるのではないかな。

おわりに

ここまで大都市圏の寺院と過疎問題についていくつかの角度からみてきた。あまり掘り下げて触れることはできなかったが、窺えることとして、人口集中に起因するさまざまな優位性はあるものの、取り巻く環境などから大都市圏の寺院においても不安要素が決してないわけではないことがわかる。過疎問題の研究が先行している日蓮宗での過疎アンケート*7にある「都市における寺院の展望をどう考えますか?」という質問をみてみると、

過疎地域以外の回答者の「不安がある」は85%もあり、過疎地域回答者の66.7%を上回っている。さまざまな優位性があっても、意識下では、その展望に不安を感じていることが窺える。このような点からも大都市圏に所在する寺院といえども、過疎問題に関係ないとはいえない状況ではないだろうか。

過疎問題への処方箋は、確立されていない……。これまで人口も経済も右肩上がりだった時代を経験してきた私たちは、初めて経験する人口減少社会に対して、中長期的にどのようなして対峙していくことが適切なのか、ともに考え、探りながら進んでいくしかない。

平成27年度には総合調査が実施される予定なので、調査結果を待ち、そのデータを分析し、檀信徒の信仰継承も含めた過疎問題に関する課題に取り組んでいきたい。

- 【図表1-4・9・12】『平成22年度総合調査』真言宗智山派
 【図表5】『人口動向からみた2020年の東京』東京都政策企画局
 【図表6】『日本の地域別将来推計人口（2013.3推計）』国立社会保障・人口問題研究所、『国勢調査（2010.10）』より作成
 【図表7・8】『2050年の大都市圏・都心の限界集落化?』三井住友トラスト基礎研究所
 【図表10】『現代日本人の宗教』新曜社
 【図表11】『現代日本人と“家の宗教”』
 -JGSS-2000/2001からのデータを中心として-
 日本版 General Social Surveys 研究論文集 [2]
 【図表13】『若者における変わる宗教意識と変わらぬ宗教意識』國學院大學

- *1 ここでは、総務省発表「過疎地域市町村等の一覧（平成23年9月26日現在）」に記される過疎市町村に所在する本宗寺院のことをさしている
 *2 人口100万人以上、東京特別区・政令指定都市を含む
 *3 人口10万人未満の都市、町村
 *4 都市中心からの距離は、JR東京駅、JR新宿駅、JR渋谷駅までの最短直線距離を表す
 *5 人口の50%以上が65歳以上の高齢者になり、社会的共同生活の維持が困難になる集落をさす概念
 *6 5～49歳の女性（各歳平均人口）に対する0～4歳の子ども（各歳平均人口）比率（≒出生率）
 *7 『現代宗教研究』第44号日蓮宗現代宗教研究室

2 人口減少社会と過疎問題へのあらたな視点

智山教化センター所員 磯山正邦

はじめに

「2040年までに896の自治体が消滅する」というショッキングな予測をご存知だろうか。昨年（2014年）、日本創生会議の増田寛也座長（元総務大臣）がまとめた、いわゆる「増田レポート」である。

首都圏に移住する若年女性が増加する一方で、首都圏の出生率は低く子供が増えない。よって地方だけでなく大都市でもいずれ人口は減り、日本の人口減少は加速する。このシナリオを回避するには、東京へ向かう人口移動を地方中核都市に止めるべきである……と著書『地方消滅』（中公新書）で主張し、世間の耳目を集めた。

人口減少社会、少子高齢化、そして東京一極集中……20世紀末から現在は、高度経済成長期、バブル経済期に続く第三の東京圏人口集中期といわれている。しかし、実際は過去二回と大きく異なり、人々が東京に吸引されたというよりは、むしろ人々が地方に戻らなくなることによって生じている。「東京一極集中」ではなく「東京一極滞留」である。「増田レポート」の内容は、ショッキングで悲観的なレポートではあるが、決して「新しい」ものではなく、何年も前から予測されていたことである。

「増田レポート」が、「地方消滅」を唱えたことで、「人口減少社会」、そして「消滅可能性自治体」の議論が大きくクローズアップされてきたという経緯があるが、この件に関するメディアの取り上げ方も危機感だけを煽り立てている面がある。まず「地方消滅」という表現には大きな問題がある。地方消滅といえば、地方そのものが消滅し

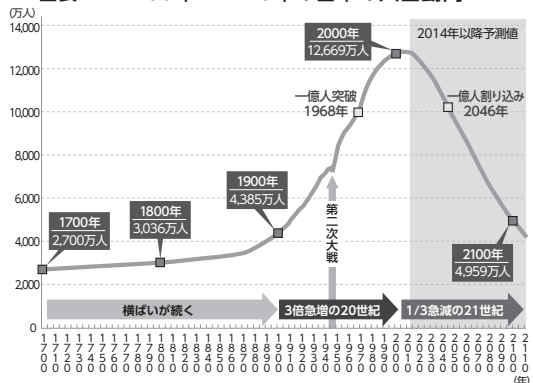
てしまうような印象を与えるが、「増田レポート」は、人口減少により「現単位の地方自治体が、このままの経営状態では潰れる」ということを唱えているに過ぎない。地方消滅ではなく、「地方自治体の破綻」を増田氏は統計分析から警告を発しただけである。

「地方が消滅してしまう」という危機感を煽り、少子高齢化問題や、地方自治体の経営問題などを全て人口問題に置き換えてしまう「地方消滅」論は、地方が抱えるさまざまな問題を棚上げし、本質から目を背けさせてしまう危険性がある。

さて、ここで私たちは考え直さねばならぬことがある。それは「人口が減少する社会は悪いのか？」ということである。

日本は明治時代からの100年で人口が3倍以上増加した。これは日本の歴史からすれば本来異常なことであるが、政府も国民も異常が100年続くと、人口増加が常態だと思えるようになってしまった。そして、この発想から抜け出せないでいる。この「人口増を是とする価値観」からどれだけ抜け出せるか。これからの100年で日本の人口の1/3が消える。この「人口減少社会」を常態と考えて、将来像を描く必要がある。

図表1: 1700年～2110年の日本の人口動向



(注) 1700年から1871年のデータがない年は線形補間を行った。
(出所) 1800年から1871年までは『経済統計で見る世界経済2000年史』(財)政治経済研究所。
1872年～2009年までは総務省、2010年以降は国立社会保険・人口問題研究所のデータより野村證券作成

人口減少は日本の将来の足かせなのか？
実は素晴らしい社会なのではないのか？
現在（そして、これから）は、生まれてきた子供はほとんど死なない。人はほとんどが70歳、80歳以上まで生きることができる「長寿化社会」である。この社会は人類の長年の夢ではないのか？人口が減少するのであるから、檀信徒が減るのはどの寺院にとっても同様である。しかし、全体的な人口が減ることによって、かえって親密な寺檀関係が築けるようになるかもしれない。これからの日本は異常だった人口増加の100年を経て、適正人口に移行しているのである、というように価値観を変えていく必要があろう。

私たち僧侶にとって長年の経験と智慧によって培われた「感覚」は大切であるが、それにばかり頼っていると現況を見間違っているのではないか。「昔はよかった」「昔はこうだった」という思考のままでは、未来に光は見出せない。過去を否定する必要は全くないが、過去と現在、そして未来を同じ俎上に載せて「お寺」のことを考えていく必要がある。いままでの常識、価値観の相対化である。

過疎問題が論じられる時、過疎地に対してネガティブなイメージから脱した話題が提供されることがまずない。だが、この「過疎問題」は、およそ50年前に顕在化したことであり、高度経済成長、人口増加の真只中での話である。現在とは、社会的背景も私たちが享受する社会的インフラも全く異なる。当時と同じ基準で「過疎問題」を考えて、人口も経済も増大する「都市部」の視点から地方の「過疎地対策」を講ずることは、無理があるように感じる。

今回のレポートでは、冒頭に取り上げた「増田レポート」に反駁する主張をする学者、識者の意見を参考にしながら、従来の過疎問題に対する常識を取り払い、過疎地域に

ある寺院を取り巻く環境を再考したい。

～合計特殊出生率と経済格差～

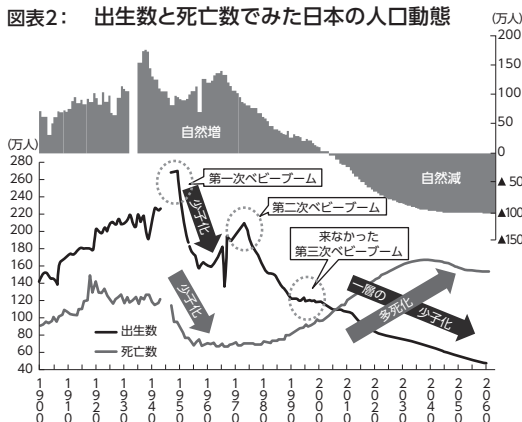
人口数の急減と人口構造の高齢化を招いたのは、いうまでもなく「結婚をしない」「子供を産まない」人が増えたからである。日本では現在「晩婚化」や「未婚化」が進行している。婚外子の慣習や文化が浸透していない日本では、結婚しなければ、子供を授かることはない。また結婚が遅くなると、産まれる子供の数は自ずと限られる。いずれにしても結果は少子化につながる。結婚適齢期は個々人によってさまざまであって構わないと思うが、「妊娠適齢期」は生物学的・医学的見地から、その期間は限られてくる。

しかし、ここでこの問題の所在を明らかにしておきたい。すなわち「少子化」が問題なのか、「未婚・晩婚化」が問題なのかということである。

2～30歳代の「夫婦」に向かって、ついうっかり「お子さんはまだ？ 最近は少子化だから、たくさん作ってくださいね」等と、お墓詣りに来られる若い夫婦に話かけたことはないだろうか。

総務省統計局によれば、子供の数（15歳未満人口。平成26年）は、平成25年に比べ16万人少ない1633万人で、昭和57年から33年連続の減少となり、過去最低となった。また、子供の割合も、昭和25年には総人口の3分の1を超えていたが、第1次ベビーブーム期（22年～24年）の後、出生児数の減少を反映して低下を続け、40年には総人口の約4分の1となった。その後、昭和40年代後半には第2次ベビーブーム期（46年～49年）の出生児数の増加によって僅かに上昇したものの、50年から再び低下を続け、平成9年には65歳以上人口の割合（15.7%）を下回って15.3%となり、26年は12.8%で過去最低となった。まさしく「少子高齢化」である。

図表2: 出生数と死亡数でみた日本の人口動態



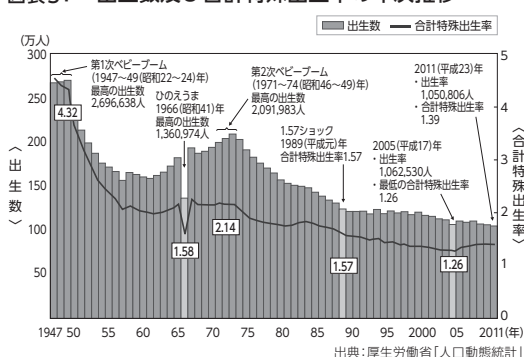
(注) 1944-46年のデータはない。
(出所) 両図とも、厚生労働省「人口動態統計」、国立社会保障・人口問題研究所
「日本の将来推計人口」より野村證券作成

ただ、ここで「合計特殊出生率」という指標を考慮する必要がある。女性が出産可能な年齢を15歳から49歳までと規定し、それぞれの出生率を出し、足し合わせることで、人口構成の偏りを排除し、一人の女性が一生に産む子供の数の平均を求めた指標である。すなわち、19××年の合計特殊出生率が2.00としたら、一般論として、その年の夫婦には平均2人の子供がいるということの意味する。

その「合計特殊出生率」であるが、3人を超えていたのは1951年が最後であり、以降は平均2人である。40年前の1975年には1人(1.00-1.99)に落ちこみ、現在に至っている。

最初にも述べたが、婚外子の慣習や文化が浸透していない日本では、結婚しなければ子供が産まれないといってよい。実は、40年前から「結婚をした夫婦」が授かる子供の人数は、あまり変化していないのである。つまり、少子化の根本原因は、結婚しない(できない)ことなのである。実際、1972年には100万組以上あった婚姻件数が、2012年には66万組まで減っている。もちろん、少子化は晩婚化による晩産化も要因にある。

図表3: 出生数及び合計特殊出生率の年次推移



さて、結婚での障害の上位に挙げられるのが収入面での問題である。厚生労働省が行った意識調査「若者の意識に関する調査」によれば、1992年の第1回調査から2010年の第5回調査まで「結婚できない理由」の第1位は「適当な人にめぐり合わない」であり、男女ともに30%を超えている。だが、これは結婚を考慮する時、誰もが直面する「普遍的な葛藤」であろう。注目すべきは第2位の「結婚資金が足りない」である。男女ともに20数%をマークしている。

一方で国立社会保障・人口問題研究所が行っている「出生動向基本調査」によると、「いずれは結婚しようとする未婚者の割合」は、1982年と2010年を比較すると男性は9.6ポイント、女性は4.8ポイント減少しているものの、9割弱で推移しており、依然として高い水準にある。若者の結婚願望は決して低いわけではない。

果たして、結婚できない(少子化の原因)理由を、単純に収入面と結び付けてしまっているのだろうか。このことに異議を呈して、データを発表している学者がいる。社会学者(農村社会学)の徳野貞雄氏である。

徳野氏は、沖永良部島の和泊町・知名町を中心に九州・沖縄の離島での出生率から興味深い仮説を挙げている。メディアが通説としている(もしかしたら、日本の若者

もその「通説」に踊らされているのかもしれないが)「現代日本社会の少子化・低出生率は、都市部を中心とした若年層が、景気の低迷のために子供を出産・育児する余裕がないからだ」というステレオタイプな意見を一刀両断しているのである。

徳野氏が仮説の根拠としている数値をいくつか紹介したい。

沖永良部島の和泊町・知名町の町民1人あたり所得は、東京の439万円に比べ、半分以下の198万円と189万円であり、一般的理解では、経済的には所得形成能力の低い条件不利地であることは明らかである。しかし、両町を含む九州・沖縄の離島の合計特殊出生率を見てみたい。日本の合計特殊出生率が1.41人(2012年)と長期の低位を示していることは先に述べたが、合計特殊出生率が2.0人を超えている高出生率の15自治体のうち熊本県山江町を除くすべてが九州・沖縄の離島であり、同時に「過疎地」なのである。

図表4： 合計特殊出生率(上位15位)

	都道府県	市町村	合計特殊出生率	15～49歳女性人口(人)
1	鹿児島県	大島郡 伊仙町	2.42	1,056
2	鹿児島県	大島郡 天城町	2.18	1,036
3	鹿児島県	大島郡 徳之島町	2.18	2,303
4	鹿児島県	大島郡 和泊町	2.15	1,163
5	長崎県	杵岐市	2.09	5,174
6	沖縄県	島尻郡 南大東村	2.06	230
7	鹿児島県	出水郡 長島町	2.05	1,024
8	熊本県	球磨郡 山江町	2.03	702
9	沖縄県	宮古島市	2.02	10,568
10	鹿児島県	熊毛郡 屋久島町	2.02	2,271
11	長崎県	対馬市	2.01	6,606
12	沖縄県	島尻郡 伊平屋村	2.00	268
13	鹿児島県	西之表市	1.99	3,078
14	鹿児島県	大島郡 知名町	1.99	1,175
15	鹿児島県	大島郡 喜界町	1.98	1,307

資料：厚生労働省「平成15～19年 人口動態保健所・市区町村別統計の概況」

該当地域が、人口が減少している過疎地であり、経済的にも産業立地がきわめて希薄な経済的不利条件地域であることを鑑み

ると、(高出生率の自治体が)九州・沖縄の離島に集中しているということは、単なる「地理空間的特殊性」で済ませられるものではなく、なんらかの社会的事象としての共通性を有していると考えてよいだろう。

逆に合計特殊出生率の下位10位を見ると、出生率0.7人台の超低出生率は、所得も高く経済・社会構造が高水準にある東京を軸とした大都市の地域である。つまり、「大都市よりも『社会的辺境』といわれている離島社会のほうが暮らしやすい社会ではないか」と徳野氏は仮説を形成するのである。現状の原因を経済構造の決定に求めない徳野氏の説は、過疎地域の寺院の在り方を考えるうえでも、注目すべき点が多々あるのではないか。

図表5： 合計特殊出生率(下位10位)

	都道府県	市町村	合計特殊出生率	15～49歳女性人口(人)
1	東京都	目黒区	0.74	69,961
2	京都府	京都市 東山区	0.75	10,483
3	東京都	中野区	0.75	78,407
4	東京都	渋谷区	0.75	53,278
5	福岡県	福岡市 中央区	0.75	51,478
6	東京都	新宿区	0.76	72,956
7	東京都	杉並区	0.78	137,042
8	大阪府	豊能郡 豊能町	0.78	4,989
9	東京都	文京区	0.80	47,940
10	東京都	武蔵野市	0.81	36,512

資料：厚生労働省「平成15～19年 人口動態保健所・市区町村別統計の概況」

～「過疎」問題の再認識～

日本の過疎問題は、単に人口が減ったことで発現したのではない。先にも述べたが、100年間続いた急激な人口増加をベースとした社会経済システムが、現在の人口減少型の諸現象に価値観・行動様式が対応しきれない「システム過疎」であるといわれている。行政・自治体も40数年前に過疎問題が俎上に載せられた時の「感覚」で、現在の諸問題に対応しようとするからシステム

不全に陥り、かえって「過疎地」を創出してしまっているのではないか。例えば、過疎地の不便さを示す指標のひとつとして公共交通機関の発達度合がある。今でも過疎地の自治体の多くは、生活様式の変化も考えずに外形的な統計データに依拠した思考様式から抜け出せずに、公共交通機関に莫大なお金と時間をかけている。先述の徳野氏はいう。「昭和40年頃まで、日本人の庶民の多くが個人的に自家用車を保有していない状態のなかでは、バスと鉄道が公共交通機関であっただけの話である。農山村の多くの人が、自家用車を保有している現在は、自治体の担当者は自家用車の公共機関としての機能とシステムを充実させる政策を考えるべきである」

徳野氏が、とある過疎地で実施した定点観測によれば、「人っ子一人いない」交差点で交通量調査を行ったところ、1時間あたり120台の車両の移動とそれらに乗る約150人の交通があることがわかった。しかし、徒歩から車に移動手段が変わると道端から人の姿が消えたように錯覚してしまう。これは人口減少の実態よりも「車による人の消しゴム機能（徳野氏）」による錯覚が大きい。また、その地域では携帯電話やパソコンの利用頻度も高くなっており、昭和40年代とは比べものにならないくらいの情報量が飛び交っているという。過疎地を一元的に捉えることの乱暴さを示す好例であろう。

また「家族」に関しても同様のことがいえる。私たちは「家族」と「世帯」を混同していないだろうか。世帯が縮小しても家族の機能は空間を超えて存在している。高度経済成長期以降の日本は、若壮年層の労働力を都市に移動させ、社会全体の経済発展を達成した。だが、その陰では個々の家族や世帯の在り方を急激に縮小させた。こ

れを我々が漠然と「核家族化」として認識してきた。しかし、この現象は「世帯の分離と縮小化」であって、それに伴う家族機能の残存・変容については明確な検討をしてこなかった。

世帯は「同一家屋に居住している者の生活集団」であり、行政的に住民台帳に把握され統計化できる。一方、家族は世帯と空間を超えて存在するし、その機能も範囲も多様である。だから、行政の表面上のデータでは把握できない。過疎地域の独居老人は行政上の「世帯」というデータでは「家族のいない独居老人」である。しかし、車を使えば数分で往来できる距離に息子夫婦と孫が住んでいるかもしれない（定点観測でデータを出している研究者もいる）。同一世帯に住んでいなくても「家族」であり、交通・情報手段の発達した現在では、昭和40年代と異なり「家族」として機能しているのである。

過疎地域の住民にアンケートをとると、「人口は減る、高齢化は進む、跡取りはいない、将来は大変不安だ」という回答が返ってくる。しかし、「将来もずっとこの地域に住み続けたい。体力の続く限りは住み続けたい」と答える人が80-90%になるという。可能ならば他のところに住みたい、という人は少ない。過疎地域住民のこの「現実的生活基盤」は一体何であるのか。地域に根ざした現実的生活基盤を分類・検証することで、それら複数の生活基盤の連結部が顕在化してくる。寺院は、地域で現実的生活基盤の「連結」の役割を果たすことができるのではないか。そこに、過疎地域ひいては人口減少化社会における「寺院の在り方」のヒントが隠されているような気がする。

3 地方から都市部に移り住んだ檀信徒に対する 他宗派の取り組みについて ―浄土真宗本願寺派・浄土宗の事例―

智山教化センター所員 元山憲寿

はじめに

過疎化や少子高齢化という言葉が世間に浸透して長い時間が経過した。進学や就職のために地方から都市部に移り住んだ人がそこに定住し、その結果、地方の過疎化や高齢化が進んだ。

こうしたことから生じる問題のひとつに、家族と過ごす時間が少なくなり、その結果、その家に伝わっていた文化や教えが継承されなくなってしまうということがある。なかでも寺院にとって切実な問題は、家の宗教が希薄化し、その派生として、個人の宗教意識も希薄化して、宗教離れが加速してしまうことである。

そのような現状のなかで、地元を離れて暮らす檀信徒からすれば、菩提寺との「つながり」は薄れていく状況であろう。これは地方寺院だけではなく、都市部の寺院においてもいえる問題ではあるが、距離という観点から見れば地方寺院はより逼迫しているだろう。では、地方寺院が、地方から都市部へ移り住んだ檀信徒との「つながり」を再構築するための方策はあるのだろうか。

本稿では、檀信徒とさまざまな面での「つながり」を再構築するための参考事例として、他宗派が実際に行っている取り組みを紹介し、過疎問題対策への一助としたい。

1. 菩提寺のある地元を離れて都市部に 住む檀信徒に向けて…

浄土真宗本願寺派（以下、本願寺派）と浄土宗は、十数年前から都市部に移り住んだ檀信徒を対象に、教区や末寺単位で都市部にある寺院を会場に法要を行っている。

この取り組みでは、菩提寺の僧侶が離郷した（都市部へ移り住んだ）檀信徒のもとへ行くことによって、「つながり」を再構築することを目的とし、結果として、葬儀や法事を行う際、「菩提寺の住職にお願いしたい」という気持ちが檀信徒に生じることなどを期待している。

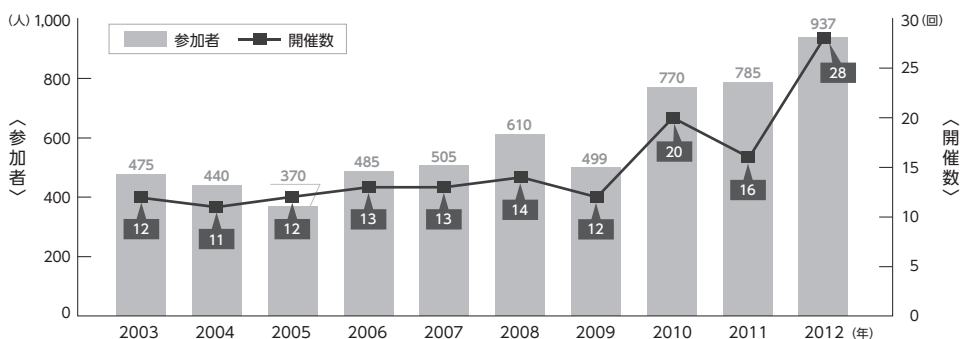
本願寺派で行われている「離郷門信徒のつどい」は、地方の寺院が大寺院（主に、本願寺（京都府）・築地本願寺（東京都）・名古屋別院（愛知県）・津村別院（大阪府））を会場として、菩提寺から離れた都市部に住んでいる門信徒を集めて法要を行っている。

浄土宗では、本願寺派のように会場がいくつもあるわけではなく、大本山増上寺を会場にして「東京合同法要」という名称で法要が行われている。

2. 浄土真宗本願寺派の取り組み事例 「離郷門信徒のつどい」について

本願寺派では、1970、80年代ころより「離郷門信徒のつどい」が行われていた。しかし当初は地方寺院が主体で行い、宗派としてはかかわっていなかったため、詳しい実態を窺い知る資料はない。本願寺派が「離

図表1: 浄土真宗本願寺派「離郷門信徒のつどい」開催数・参加者数の推移



「離郷門信徒のつどい」の運営の推奨、補助をするようになったのは2003年からだという。ここで「離郷門信徒のつどい」が行われるようになった2003年から2012年までの開催数の推移を示すと【図表1】のようになる。宗派が対応を始めた2003年から、開催する寺院数が順調に伸びているのがわかる。

増加の理由は、地方寺院の危機意識がより高くなってきていることの現れであろう。一方で門信徒の「先祖供養はしたいが、地元まで戻るのは大変」というニーズにも適ったものだったのであろう。

「離郷門信徒のつどい」は、基本的には教区や組（組寺）の単位で行われているが、まれに一カ寺で行う場合もある。

ちなみに、築地本願寺で行われている「離郷門信徒のつどい」の開催までの手順は【図表2】のとおりである。

開催を希望する教区や組が【図表2】にあるように相談すれば、築地本願寺首都圏開教推進部が開催までの道筋を提示してくれ、実際に教区や組が行う作業は、門信徒の方々への案内程度であるため、教区や組の負担は少ない。さらに企画・運営は教区や組で行うので、僧侶一人一人の負担も軽減する。

図表2: 開催までの手順（築地本願寺の事例）

- ① 築地本願寺首都圏開教推進部（以下、開教推進部）へ相談・連絡申し込み。
- ② 開教推進部からガイドブック（開催の手引き）が送られてくる。
- ③ 開教推進部に連絡し、ガイドブックに掲載されている開催モデルを参考に、教区や組の中で内容の相談や日程の決定。
- ④ 開教推進部で、会場の使用状況などを確認、調整。
- ⑤ ガイドブックに付いている『「離郷門信徒のつどい」開催申込書』に必要事項を記入し、開教推進部に提出。
- ⑥ 参加者（離郷門信徒）を募る。
- ⑦ 開教推進部と最終確認（日程や準備品など）。
- ⑧ 「離郷門信徒のつどい」開催。

図表3: 開催プログラム例

<p>築地本願寺にて</p> <p>【主催者】 ○○教区 △△組</p> <p>【開催日】 2012年6月10日(日) 11:00～14:00</p> <p>【会 所】 築地本願寺 東日本間</p> <p>【参加者】 38名(住職2名、門信徒36名)</p>	<p>《プログラム内容》</p> <table> <tr> <td>開 会</td><td>正信偈を皆さんと一緒に</td></tr> <tr> <td>勤 行</td><td>ご講師のご法話をご聴聞</td></tr> <tr> <td>法 話</td><td>お弁当を皆さんと一緒に</td></tr> <tr> <td>茶 話 会</td><td>自作のスライドショーを観賞 田舎の様子やお互いの情報交換</td></tr> <tr> <td>閉 会</td><td>次回また再会できることを楽しみに</td></tr> </table>	開 会	正信偈を皆さんと一緒に	勤 行	ご講師のご法話をご聴聞	法 話	お弁当を皆さんと一緒に	茶 話 会	自作のスライドショーを観賞 田舎の様子やお互いの情報交換	閉 会	次回また再会できることを楽しみに
開 会	正信偈を皆さんと一緒に										
勤 行	ご講師のご法話をご聴聞										
法 話	お弁当を皆さんと一緒に										
茶 話 会	自作のスライドショーを観賞 田舎の様子やお互いの情報交換										
閉 会	次回また再会できることを楽しみに										

次にあげた【図表3】は、築地本願寺が推奨している開催当日のプログラム例である。

あくまで一例であるが、要望に応じて拝観案内や記念写真などもプログラムに盛り込まれるようだ。【図表3】のプログラム例の、法事の形態、他にも彼岸会や盂蘭盆会、また、花まつりや寺子屋も併せて行うという事例もあるそうだ。開催する教区や組の意図、また、門信徒からの要望によって「離郷門信徒のつどい」のプログラムは変わってくるという。

実際に参加した門信徒からは、「久しぶりに住職に会えてよかった」「昔お寺にお参りした時のことを思い出した」、「久しぶりにお経をお唱えして気持ちよかった」といった声がある。これらの声からも「離郷門信徒のつどい」が好評だということがわかる。距離が離れた門信徒も先祖供養をしたいという気持ちや菩提寺との関係を保ちたいという思いが少なからずあるからこそ、先に記したような声が出てくるのであろう。

地方寺院の危機意識から始まった「離郷門信徒のつどい」は、寺院のみならず、門信徒のニーズにも適い、寺院と門信徒、住職と門信徒との結びつきに関して大きな役割を果たしていることが窺える。

以上が本願寺派（今回は築地本願寺を中心に扱った）で取り組まれている「離郷門信徒のつどい」についての概観である。

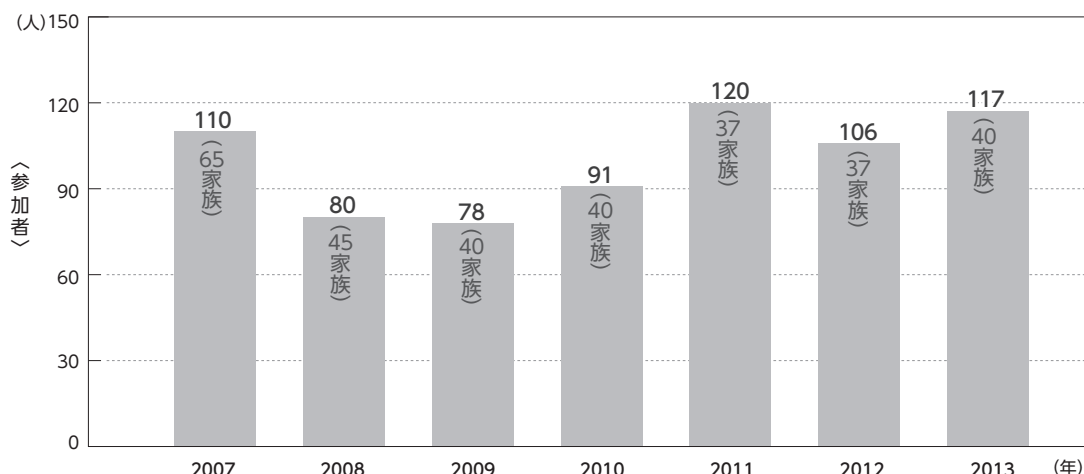
3. 浄土宗の取り組み事例 「東京合同法要」について

浄土宗では、「東京合同法要」という名称で本願寺派と同様の取り組みが行われているが、会場は大本山増上寺のみである。それは、「東京合同法要」は宗派が推進しているわけではなく、各教区からの要望を増上寺が受け入れる形で開催しているためである。増上寺では、「東京合同法要」を、「地方寺院檀信徒教化支援事業」と位置付けて、支援を行っている。

開催までの手順は、教区内で「東京合同法要」に参加したい寺院を募り、会場となる増上寺に開催したい日程を伝え、増上寺側と詳細を決めるという流れであるが、プログラムに関しては、末寺や教区が各自で考え、増上寺は、会場の提供が主な支援である。しかし、プログラムの内容について、浄土宗総合研究所も相談は受け付けているという。

「東京合同法要」は2007年に石見教区（島根県）が初めて開催し、それ以降も毎年行っている。石見教区が「東京合同法要」を開催するようになった経緯は、教区内の会合

図表4: 石見教区「東京合同法要」参加者数・参加家族数の推移



で、「檀信徒の多くが東京にいつてしまった」という話題が多く出され、教区内寺院が合同で首都圏に移り住んだ檀信徒に対して法要を行おうということが、もとなっている。

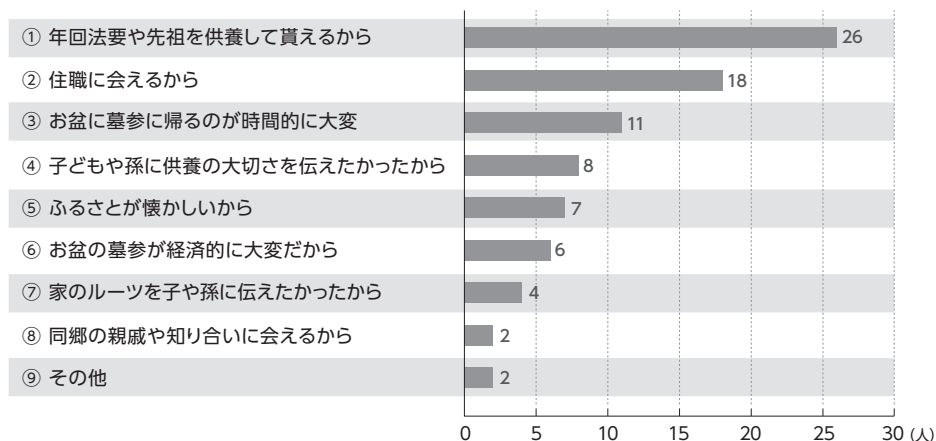
石見教区の「東京合同法要」の参加者数・参加家族数の推移は、【図表4】のとおりである。初開催から参加者は約100名前後で推移している。一つの教区でこれだけの参加者があるということは、「先祖供養をしたい檀信徒が多くいる」という表われだ。石見教区が行った「東京合同法要」に参加した檀信徒へのアンケートでは、「どのような理由で参加したのか」という設問に対

して【図表5】のとおりの結果となった。一番には「先祖供養」があげられているが、二番目に多かった理由に、「住職に会えるから」があるのは住職として嬉しい理由であり、今後の寺院活動にも一筋の希望が持てるものであろう。

現在浄土宗内では、石見教区の取り組みを受けて、2013年には静岡教区、2014年には宮城教区が「東京合同法要」を行っている。

静岡教区は「お盆供養法要」という名称で2013年に開催し、関東近郊に住む檀信徒に対して案内状を送付して参加者を募り、約120名の参加があったという。首都

図表5: 「東京合同法要」に参加した理由



圏から比較的近い静岡県で、これほどの参加者数があったという点は、開催教区や浄土宗総合研究所としても意外であったという。静岡教区の取り組みの特徴は、「檀信徒参加型」で法要が行われた点があげられる。参加した檀信徒の一部に内陣へ座ってもらい、木魚を使って、僧俗一体となり念仏をお唱えしたという。

宮城教区では、『ふるさと「縁～enishi～」大回向 東日本大震災追悼法要』と称して、2014年に東京近郊在住の檀信徒に対して合同で法要を行い、約120名の参加があったという。特徴は、被災した地域に住んでいる檀信徒にも案内状を出し、団参も併せて行ったという点と、法要を「大回向」という形式で行った点である。

「大回向」とは、江戸期の天明の大飢饉の際、仙台藩下の三つの寺で持ち回りで五月十三日から十五日までの三日間念仏行を勤め、飢饉救済のため食事の用意や風呂の提供をしたことにもとづいた法要の形式である。「大回向」は近年中断していたが、宮城教区の『ふるさと「縁～enishi～」大回向 東日本大震災追悼法要』にて、その精神を受け継ぎ、「大回向」の形式を復活させて、首都圏在住者や東日本大震災の物故者のために合同法要を行ったのである。

これまで石見、静岡、宮城教区の「東京合同法要」を見てきた。開催名の違いはあるが、どの教区も寺院との距離が離れた檀信徒のために開催している。そして、どの教区でも参加した多くの檀信徒から「参加してよかった」や「また行ってほしい」、「初めて菩提寺の若寺庭に会えてよかった」という意見があった。

まとめにかえて

ここまで、菩提寺のある地元から離れて住んでいる檀信徒に対して行う法要について本願寺派や浄土宗の取り組みを紹介してきた。

「離郷門信徒のつどい」、「東京合同法要」のような都市部での法要の開催は、地元を離れた檀信徒と住職（寺院も含む）が、再び顔をあわせることで、檀信徒の心に菩提寺のある地元の風景を想い起こさせ、それが心の距離を縮め、また再び菩提寺を訪れるきっかけになっているようである。

実際に長年続けている浄土宗石見教区では、「東京合同法要」を行ったことにより付け届けや寺院行事の際に島根県まで帰郷してくれる方が増加したという報告がある。このように「離郷門信徒のつどい」や「東京合同法要」を行うことで「つながり」を再構築できることがその意義の一つである。「つながり」という点では、地方寺院だけではなく、大都市にある寺院でも見過ごせない問題であり、今後、各寺院や教区で「つながり」の再構築の方法を模索していくことが、重要になっていくだろう。それこそが寺院の活性化にもつながるはずである。

IV 教化推進の展望

仏さまと出会う実践「阿字観」の新たな資材 「阿字観御本尊掛軸」について

智山教化センター所員 倉松隆嗣

「阿字観」へのこれまでの取り組み

本宗では長年にわたり、教化活動の一つとして阿字観の実践を推進してきました。檀信徒が自身に仏さまを感じ、心に安らぎを得ることのできる瞑想体験として、多くの檀信徒に阿字観を実践していただけてきました。

これまで本宗では、檀信徒に阿字観を実践していただくため、檀信徒向けの「阿字観作法」を作成したり、阿字観の指導者を養成する「阿字観指導者養成講座」の開催、阿字観実践のご本尊さまとして「阿字観・月輪観本尊(パネル型)」の開発などを行い、その普及に努めてきました。その後も阿字観道場のモデルケースとしての役割も担う「真福寺阿字観会」の定期開催、阿字観指導者養成講座の発展形としての位置づけとして伝法院開設講座で「阿字観指導者の教理と実践」を開講し、教師のさらなる深い理解と実践指導を目指した指導者の養成も行ってきました。また従来の阿字観・月輪観本尊(パネル型)の見直しも行い、普及版として、よりお求めやすいものを作製しました。

強調する教化活動「阿字観」

平成25年度より「生きる力 一安らかなる心とともに」という新たな教化目標のもと、平成25～26年度は教化年次テーマ「仏

さまに祈る」を推進してきました。そして平成27～28年度は教化年次テーマ「仏さまと出会う」を推進し、強調する教化活動として阿字観が取り上げられます。

宗教に対する一般の目は、近年厳しいといわれていますが、その反面、実践や宗教体験が多くの人々の心をとらえています。心の安らぎを仏教の実践に求めている人が少なくないことは皆さんも実感していることでしょう。阿字観の実践もまたしかりで、昨年丸の内で開催された高野山カフェでは、若い方を中心に多くの方が阿字観体験に訪れたそうです。真福寺阿字観会でもこれまで数多くの方が阿字観を実践され、瞑想の素晴らしさを体験しています。

掛軸型の阿字観ご本尊の提案

阿字観を推進をしていく中で、教師の方々から阿字観のご本尊さまはパネルのような体裁だけでよいのか、掛軸のご本尊さまが必要ではないのか、といったご指摘もいただいていた。私たちが加行や練行など、修行するときに用いるご本尊さまは掛軸の形が一般的です。伝法灌頂で用いる両界曼荼羅も掛軸を用います。ですから修行のご本尊さ



僧侶の自行としてご活用いただくとともに、檀信徒の目に留まる床の間などにもお飾りしていただくことも想定して作成しました。

まという時に思い浮かべる形が掛軸というのは自然なことでしょう。

そこで、普及版やパネル型との差別化を図る、掛軸型のご本尊さまを作製することになりました。

「阿字観御本尊掛軸」の体裁

このご本尊さまの阿字、蓮華、月輪は普及版、パネル型の阿字観本尊と同じ図柄を用いていますが、この図柄は、普及型の本尊を作製する際にそれまでのパネル型本尊の図柄を見直し、阿字の金色をはっきりとした色合いに、蓮華を八葉にして線を太くしました。蓮華の八葉は“八枚”という意味ではなくて“たくさん”という意味だというご指摘もありましたが、昔からある阿字観ご本尊さまの蓮華は八葉のものが多く、八枚（一枚は阿字の後ろになっている）としました。

阿字観は瞑想中、明るからず、暗からず、灯明ほどの明るさで修するといわれていますので、暗いところでもはっきり分かるよう線を太くしました。

掛軸ですから、瞑想のご本尊さまというだけでなく、床の間にお飾りすることも想定しておりますので、阿字観のご本尊さまを掲げて、阿字観をはじめとして、阿字のことや大日如来についてのご法話をさせていただくといったことも活用法として考えられます。

掛軸立ての活用

パネル型のご本尊さまでご指摘をいただいていた点に、「瞑想時の目線をしっかり確保できるよう、各自の体型に合わせてご本尊さまの高さを微調整できるものはないか」というものがありました。阿字観を修する時には、湖面に映る月を眺めるように目線を正面から少し落とすといわれています。このように、瞑想では姿勢には気を付けなければなりません。こういった点に対応するため、掛軸本尊では、ご本尊さま専用掛軸立ても作成しました。パネル型



掛軸に合せて作成した掛け軸立ては、イスに座って阿字観を実践される方にも対応することがきます。

の場合、自分の座る位置を前後に調節するなどして対応しますが、掛軸立てでは自分の目線に自由に合わせることができます。

また足の不自由な方にも瞑想体験をしていたくため、安座や正座、さらにはイスにすわったままで瞑想をしていただくことがあります。この掛軸立てを使用すれば、イスを使っても瞑想にも対応することができます。

阿字観のこれから

宗教に対して、これからも多くの方が癒しや心の安らぎを求めてくることでしょう。そんな希求に私たちはどのように応えて行けばよいのでしょうか。

本宗では「仏さまと出会う」という教化年次テーマのもと、檀信徒に対して直に心の安らぎを実感していただける教化活動を提案しています。その中でも阿字観は敷居が高い、というご意見をいただくことがあります。確かに指導者としての立場で考えれば、瞑想の指導というのは簡単に考えることはできません。しかし、瞑想の作法にのみ囚われるのではなく、宗祖弘法大師がおっしゃるように、行住坐臥心に阿字を思うことこそが阿字観であるという観点で、まずは阿字を心に感じる実践をしていただくことが大切だと考えることも必要なのではないのでしょうか。

覚鑊上人は、臨終の際には体は動かなくとも口に阿の息を唱えることでそれは阿字観となるといわれています。究極的には、自身に阿字のご本尊さまを感じるとは、方法に囚われるよりも実践するその心持が大切なのではないのでしょうか。まずは阿字観を檀信徒に実践していただく。そして阿字観を契機に、檀信徒が阿字を心に感じて安らかな日々を過ごす。こんなに素晴らしいことはないのではないのでしょうか。

仏事がわかるリーフレットvol.1,2を発行して —— 発行の経緯とその活用 ——

智山教化センター所員 倉松隆嗣

次世代に伝わらない仏事

これまで檀信徒にとって仏事は、日常生活の中で両親や祖父母などから子や孫に自然と伝わっていったといわれています。風習は教理と違い、その土地や地域で暮らす人々のなかでの共通認識として共有されてきた知識ですから、そこで教師が手取り足取り仏事を説明することは特に必要なかったはずです。檀信徒も、仏事を知っていることは至極当然のことだったでしょう。

しかし近年、核家族化が進むとともに、宗教離れが相まって、仏事についてその大切さが次世代に伝わっていない現状があります。

このような現状において私たち教師は、檀信徒に対して「仏事について理解を深めていただきたい」と、誰もが願っていることでしょう。これまでも私たちは、檀信徒に対してどのようにしたら仏事の理解を深めていただけるか、という願いに対し、さまざまな方策を取ってきました。

リーフレットという方策

本宗では、その方策の一つとして、昭和45年から智山教化研究所より「生きる力」のリーフレットを頒布してきました。そのタイトル数は50を超え、檀信徒が仏教や仏事の理解を深める手立てとして多くの寺院で活用されてきました。法要や法話での頒布、郵送など手軽に渡せて価格も安い。自分が説明しなくても読んでいただければ把握できる。このように、リーフレットはコストパフォーマンスの高い配布物として活用されてきました。

このリーフレットが発行されてから約45年。現代の風潮にあわせて、文字の大きさや内容などを見直す時期にきているのではないかと。ということで、智山教化センターで新たなリーフレットを企画・編集することになりました。

新たなリーフレットの発行

平成26年度、新たに企画したリーフレットは、そのシリーズを「仏事がわかるリーフレット」と名付け、vol.1は「ご法事の意味―亡き人と出会う時を過ごす―」、vol.2は「お護摩のご利益―所願成就を仏さまに祈る―」というタイトルで発行しました。新規のリーフレットの作成するにあたり、まず何をテーマにするかが話し合われました。これまでさまざまなタイトルが発行されてきた「生きる力」リーフレットのタイトルももう一度見直し、多くの寺院で活用いただけるものは何かと所内会議を中心に議論を重ね、最終的に滅罪と祈願それぞれから1タイトルずつ出すことになりました。

リーフレットの体裁と頒布実績

「仏事がわかるリーフレット」は、A5版カラー4ページで、これまでの「生きる力」リーフレットのB6版より一回り大きなサイズにしました。これは、文字の大きさを一回り大きくするとともに、イラストや写真を使ってより分かりやすく解説するため、活字離れが進んでいるといわれている現状に配慮してのことです。文字ばかりだと、読んでもらえないことも、イラストなら一目瞭然、目に留まりやすくなります。難しい仏教用語もなるべく避け、多くの方に理解していただけるよう配慮しました。

平成26年4月1日からの一年間で、vol.1「ご法事の意味―亡き人と出会う時を過ごす―」の頒布数は74,914部、購入寺院数は242件、vol.2「お護摩のご利益―所願成就を仏さまに祈る―」の頒布数は40,193部、購入寺院数144件にのぼり、多くの寺院でご購入ご活用をいただいています。では実際にこのリーフレットをどのように活用すればよいのでしょうか。

vol.1「ご法事の意味―亡き人と出会う時を過ごす―」の具体的活用法

このリーフレットは、なぜ法事をするのかその意味を知っていただき、法事を疎かにしないよう檀信徒にその大切さを理解していただくとともに、実際に法事で行なうことや、準備品などを説明しています。

現在、葬儀を出す施主は、仏事の知識が何もないままに葬儀を終えてしまうことも珍しくありません。法事をするということもよく分かっていない場合もあります。法事をしたくないわけではなくて、分からないだけという施主もいます。

ですから、葬儀が終了したら今後のことをお話する時にこのリーフレットを施主や家族などにお渡しして、葬儀の後の法事も故人を弔う大切な仏事であることを理解していただきましょう。

現在は、意味が分からないことはしたくない、という風潮があります。法事の意味をしっかりと理解していただくことは、檀信徒の不安を取り除くことにもなります。年の初めに法事の案内を出している寺院では、そこに添付してお送りすることも有効です。また、何でも合理的に省略することを是とする風潮に対しても、しっかりと供養をすることの大切さを伝えることはとても大切なことです。

他にも法要時、参列者に配布したり、法話のネタとしても活用していただきたいと思います。

vol.2「お護摩のご利益―所願成就を仏さまに祈る―」の具体的活用法

密教寺院において重要な護摩祈願の大切さを伝え、寺院の役割が滅罪だけでなく、生きている私たちに利益をもたらすことを知っていただくとともに、本宗には、護摩祈願で有名な大本山や別格本山など、多くの祈願寺院があることにもふれています。そして護摩祈願の清々しい火炎、身と心を清めて、生きる力となることを実感していただくため、護摩祈願に参列する素晴らしさも説明しています。

これらを檀信徒に伝えるため、お護摩を申込みされる方にお渡しいただき、また、護摩堂など参拝されたご信徒に手に取っていただくことも有効かと思います。

お護摩札についての説明では、お札をお祀りする場所がないという家庭でのお祀りの参考となるよう、お祀りの仕方をイラスト入りで解説しています。

お護摩の意味やその扱い方など、順を追って説明していますので、護摩祈願の法話の時にこのリーフレットを手元資料として配布することも有効ではないでしょうか。

終わりに

これから仏事を次世代に伝えるのは、親から子よりも、教師から直接檀信徒へという場合が多くなることは間違いありません。その教師の負担を少しでも軽減できるよう、今後も「仏事がわかるリーフレット」の発行を進めていく予定ですので、皆さまのご活用をお願いいたします。



寺子屋交流会、青少幼年教化指導者養成講座からみる 青少幼年教化の展望

智山教化センター所員 佐藤英順

青少幼年教化活動を学ぶ場

現在、本宗において青少幼年教化を学ぶ場は「青少幼年教化指導者養成講座」と「寺子屋交流会」がある。「青少幼年教化指導者養成講座」は、その具体的活動である寺子屋を教師・寺庭婦人が自坊で開催するために必要なノウハウを総合的に学ぶ研修会。そして「寺子屋交流会」は、すでに寺子屋活動を実践している教師・寺庭婦人が交流し、互いの活動に学び合う他、教化センターが提案する寺子屋で活用できる工作などの活動プログラムをワークショップ形式で習得することで、各自の活動のさらなる充実をはかってもらうための会である。

前者においては、平成16年に「教化活動実践セミナー」の枠で、かつては総本山智積院をはじめ、大本山高尾山薬王院や東海教区寺籍35番寂光院など、時々で会場を変えながら実施したのが始まりで、後に総本山智積院での開催が定着し、2泊3日の日程で数年間にわたり毎年開催してきた。しかし近年、受講者が減少傾向にあったため、平成24年度から隔年開催とし、平成26年度からは交通の便がよい別院真福寺に会場を移し、日程を1日開催に短縮し、より多くの教師・寺庭婦人が受講しやすいかたちで開催し、受講者の増加を試みた。

「五人の寺庭婦人！」

～寺庭婦人のエネルギーから生まれた交流会～

一方、「青少幼年教化指導者養成講座」の開催以前から、教化センターで収集蓄積し



青少幼年教化指導者養成講座の様子

た開催のためのノウハウや宗内寺院の活動事例などをまとめた『寺子屋開設ハンドブック』を平成20年度に発刊し宗内寺院に配布、寺子屋活動の周知をはかった。そしてその翌年、周知の効果を期待し、満を持して青少幼年教化指導者養成座を開催したのだったが集った受講者は10名と、残念ながら期待は裏切られることとなった。

しかしながら、受講者は少なかったものの、その半数にあたる寺庭婦人5名が、すぐさまその年の夏休みや冬休みに自坊で寺子屋を開催してくれるという成果があった。それまでの研修がなかなか実施に結び付かなかった現状から、一転、受講者の5割がすぐさま実施に移してくれたことで、教化センターは青少幼年教化の推進に手応えを感じると同時に、教化活動に積極的に関わろうとする“ニュータイプ”（新寺庭婦人）の出現に寺子屋活動の今後を期待した。

そこで教化センターでは、直ちに5名の追跡調査を行い、実際に寺子屋の現場を取材したり、お話を聞きにうかがったりした。

IV

教化推進の展望

そこでみてきたのは、各々がそのお寺の環境を活かし、開催日程や活動プログラムに創意工夫を凝らしながら意欲的に取り組んでいる姿で、その内容は実にバラエティーに富んでいて参加する子どもたちを満足させるに足る充実したものだった。

この寺庭婦人らの熱意と行動力を目の当たりにした教化センターは、この5ヵ寺の寺庭婦人のエネルギーを宗内に寺子屋活動を広げていくための駆動力にすべきだと考え、そのために、この5人の寺庭婦人が熱意を絶やすことなく活動を継続していくための支援のあり方を模索した。こうして企画されたのが寺子屋交流会である。

実践者同士が交流し、互いの活動を認め合い、切磋琢磨し、試行錯誤を重ね、さらなる活動の充実をはかっていくことを継続へのモチベーションにする交流会だ(実はこの5人の寺庭婦人、寺子屋を初めて開催した年の12月には箱根の温泉旅館で自前の女子会？ いや、活動報告会を開催していて、筆者もその報告を受けていたのだ。振り返ればこれが交流会を発案する一番のきっかけになっていたのかもしれない……)。

このようにして出発した交流会だが、後に、活動発表の時間に実践者の熱意や工夫、苦労話や失敗談など、生の声を聞けるせっかくの機会なのだからと、これから寺子屋を開催したいと考える方にもオブザーバー

参加を呼び掛け、「青少幼年教化指導者養成講座」ほど堅苦しくなく、「ちょっとのぞいてみようかな」くらいの気持ちで寺子屋活動に触れることのできる“入口的”な役割も併せ持つようになって現在に至っている。

傾向と期待

こうした寺庭婦人の活躍をはじめ、宗内で取り組まれる寺子屋の活動実態を本宗のさまざまなメディアを通じて周知してきたからなのか(そうであってほしい)、それとも、「このままでは寺院の未来はアブナイ」と寺院の行く末に不安を持つ方が増えたのか(こちらもそうであってほしい)どうかは定かでないが、ここ2年の研修受講者は少しずつ増え、同様に寺子屋を初めて開催した寺院数も微増している(平成26年度は5ヵ寺もの寺院が新たに寺子屋を開催した)。一步一步だが、青少幼年教化にまつわる施策が実を結び、宗内に寺子屋活動の輪が広がってきている。

こうした寺子屋活動だが、研修の受講者や近年に限った寺子屋開催者の傾向としては、寺庭婦人の参画が多いことがいえる。今回、交流会誕生のいきさつを長々と述べてきたのも当にこの点にある。寺子屋活動が、「お寺のために自分も力になりたい」「今のお寺を変えていきたい」「もっとお寺を地域のために開いていきたい」と考える寺庭婦人の活躍の場になっているという点だ。行き詰まりを見せている既成教団寺院がそれを打破するには、もはや女性の視点、発想力、行動力を借りなければそれは叶わないのではなかろうか。

また近年は、若い教師の寺子屋活動への参画もだんだんと目立ってきた。これは持論だが、子どもたちと直に交流する寺子屋活動ほど“教師力”を試される場はないと思う。常識を持った“大人な檀信徒”ならば、



寺子屋交流会の様子(活動紹介)

専門用語を並べてごまかした下手な説法をしても、「いいお話を聞かせていただきました」と気を遣って世辞をいつてくれるが、子どもたちはそうはいかない。楽しいことは楽しい、つまらないことはつまらない、わからないことはわからないという。正直なゆえに容赦ない(少子化で大人ばかりに囲まれて生活する子どもが多いことが影響してか、最近は気を遣える“大人な子ども”も増えてはいるが……)。

若い教師は事相や教相、口説布教や御詠歌の研鑽、青年会活動などに忙しいと思う。が、学んだものを現場に落とし込む作業も同時に必要なのではなかろうか。歯に衣着せぬ言葉にさらされ、失敗や試行錯誤を重ねるカッコワルイ実践の場が必要なのではなかろうか。そうした場だからこそ、意欲をかき立てられ、さらに努力し学ぼうとする……、もし子どもたちが喜んでくれたなら、それがそのまま成果として実感できる……。子どもを対象とした寺子屋にこそ、そうした成長のチャンスがあると信じる。次の時代の寺院を担っていく若い教師のみなさんにもっと寺子屋活動に取り組んでいただきたい。



青少幼年教化のこれから

平成27年度からは別院真福寺を会場にして、青少幼年教化研修会(仮称)の名のもとで「寺子屋指導者養成講座(仮称)」と「寺子屋交流会」の二つを「寺子屋活動に初めて触れる場」「開催するためのノウハウを身につける場」「継続の力を養う場」と位置づけた一連の研修機会として、さらなる内容の充実をはかり隔年で交互に開催していくことになっている。

この他にも、開催に踏み切れない寺院に対して、教化センターが全面的に開催を援助する「寺子屋サポート」や宗内に寺子屋活動の実態を周知する「寺子屋かわらばん」(平成27年度は『宗報』にも掲載していく予定)など、青少幼年教化にまつわる研修機会やサポート体制は充実をみせている。

有料だった「青少幼年リーフレット」も「^あ壺字の子リーフレット」と名称を変え、無料頒布(送料は実費負担)となった。さまざまな機会に子どもたちに配布できる腕輪念珠を自作するセット「腕輪念珠手作りキット(仮称)」の開発も予算化された。宗務庁も青少幼年教化を後押ししている。

多くの寺庭婦人と若い教師のみなさんには、ぜひこの追風に帆を上げてほしい。また、教区長や教区の布教師会長は教区寺院の活性化のために、各寺院のご長老やご住職はご自坊の未来を見据え、そうした方たちに寺子屋活動を勧め、研修機会に“出航”(出向)させていただきたい。

V 専門員レポート

お寺を元気にする実践 ― 正月護摩供法要の一試案 ― ～ 伝法院開設講座 「寺院活性化論」の講義から～

智山教化センター専門員 高野智哉

「こんなに間近でお護摩を拝むのは初めてです。炎に包まれて、からだや心の汚れが取れ、気分がすっきりしました……」。

これは、拙寺の正月護摩供法要に参列した檀信徒の感想です。

拙寺では、毎年1月8日、檀信徒に積極

的に参加していただくための試案を取り入れ、護摩供法要を行っています。この拙寺の事例をもとに、『檀信徒参加型法要を体験する』という内容で伝法院開設講座「寺院活性化論」の講師を務めました。以下、その内容についてまとめてみます。

① 法要次第(拙寺所用の次第)

先 九条錫杖 …… 振鈴にて発音

次 祈願文 …… 経頭により奉読

次 智山勤行式 …… 般若心経・光明真言を檀信徒とともに唱和

次 観音経偈文 …… 経頭、先に檀信徒に洒水加持し、経が始まり次第、檀信徒は護摩壇を廻り、護摩木を自ら、火中に供ずる

(次 般若心経 …… 檀信徒の護摩壇廻りの状況に応じ加除する)

次 諸真言 …… 各三反 不動慈悲咒のみ七反

仏眼、金大日、胎大日、不動慈悲咒、降三世、軍荼利、大威徳、金剛夜叉

次 諸勧請 …… 各三反

南無当山鎮守、南無勧請諸神、南無日本大小神祇、南無当年星、南無本命星、南無元辰星、南無大師遍照金剛、南無興教大師

次 諸祈願 …… 各三反

南無山内安全檀信徒健勝、南無家内交通安全、南無商売繁昌事業繁栄、南無厄難消除開運成就、南無学業成就合格祈願、南無当病平癒安産満足、南無障碍退散諸縁吉祥、南無各願成就如意満足

次 大金剛輪陀羅尼 …… 一反

次 一字金輪 …… 三反

次 後夜偈

② 配役

護摩導師…不動護摩法(一段尽)を修する

職業…………一口。経頭・太鼓、檀信徒への洒水加持、護摩壇廻りの案内を担当する
また、二口の場合は、経頭と太鼓を分担する

③ 法要時間

約30分(事前説明の時間は除く)

檀信徒への事前の説明について

① 護摩木のこと

先ず、護摩木（市販の薄い護摩木。拙寺では願い事の添護摩木とっています。）に願い事と氏名を書くこと。

そして、「お護摩は火中に種々の供物を捧げ、ご本尊さまを供養し、そのお力に依り、願い事の成就を祈り、また成就するための力をいただくもの。したがって、よくよく祈念して（いただくような仕草で）火中に供ずること。」と護摩の意味合いや護摩木の供じ方を事前説明（約15分ほど別室で行う）。

② 智山勤行式の唱和のこと

願い事の成就を願って唱えること。

③ 洒水加持のこと

自身のからだと心を清め、ご本尊さまのお力をいただく作法。合掌し、少し頭をさげ加持を受けること。

④ 護摩壇廻りのこと

案内を受け、自身の護摩木を持ち、内陣に進み、護摩壇を時計回りに廻る。その時、ご本尊さまの前で礼拝、次に護摩壇右側に移動し、その場にて自身の護摩木をよくよく祈念し、自ら火中に供ずる。終わって、自席に戻ること。

⑤ 智山勤行式の唱和、洒水加持、護摩壇廻りについては、そのつど案内をする、ということを付け加える。

心掛けていること

① とにかく継続すること

何ごともそうですが、続けていくことです。

② 住職一人でなく助法僧を依頼すること

拙寺では一口。護摩と読経・太鼓の響き

が重なり合うことが素晴らしいです。

③ 護摩壇・仏器を磨くこと

少しばかり暗い道場、光り輝く護摩壇と仏器、盛んに燃え上がるお護摩の炎、この明るさの調和具合が有り難さを増します。

④ お斎を準備すること

檀信徒との懇親の場、絆を深める絶好の機会です。拙寺では助法僧も同席します。その準備万端には、寺庭婦人の力によるところが大きいです。寺庭婦人の協力があってこそのお斎です。

まとめ ～一つの試みとして～

このような事例は、伝統的な護摩供法要とは意を異にするとところが種々あるかもしれません。しかし一方では、檀信徒が能動的・主体的に参加する機会を取り入れ、ともに法要を作り上げていくということも時流にあった方法であると思います。

冒頭の「炎に包まれて……」という檀信徒のことばは、護摩壇の近くでお参りすればこそ味わうことのできた思いです。まさに身近に仏さまを感じ、仏さまと出会った瞬間であったのでしょうか。その檀信徒の方はさらに続けます。「また、炎の近くで祈ることができ、願いが叶う気がしました。法要後のお斎も美味しくいただきました。本当にお寺に来るのが楽しいです」

各寺院には、さまざまな行事があります。檀信徒が参加することも試みの一つです。他にも色々な工夫を試みて法要を営み、行事を行う、そしてそれを通じて檀信徒とのつながりを深めていく、そういう取り組みこそがお寺を元気にする実践であると考えます。

VI

「仏さまに祈る」

智山教化センター専門員 倉松 俊弘

今年の1月、成田山新勝寺に向かう途中の出来事。小学校2年生ぐらいの女の子が一人横断歩道を渡ろうとしていた。私は車を止めて、どうぞと横断を促した。女の子は、軽く会釈をして「有り難うございます」といって渡りはじめ、渡り終わると突然くると方向を私に向け、今度は深々と頭を下げ、大きな声で「有り難うございました」といって登校していった。私は思わずはっと胸を打たれ、その子に仏を觀じ、全身の細胞が共振しているのを感じた。手を合わせ、頭を下げ、どうかあの子が今日一日無事で過ごせますように、そして汚泥に染まらずすくすくと発育しますようにと祈りを捧げた。

「仏さまに祈る」—この教化年次テーマには、二つの要素が含まれる。一つは祈る対象である仏さま。どのような、どの仏さまに祈るのか？ということである。大日如来、薬師如来、阿弥陀如来などの如来さま、地藏菩薩、勢至菩薩、觀音菩薩などの菩薩さま、不動明王、降三世明王、軍荼利明王などの明王さま、四天王、弁財天、帝釈天などの諸天、そして弘法大師、興教大師などいろいろな仏さまを拝み祈る。また、お彼岸、お盆、ご命日、あるいは毎日お仏壇の前でご先祖さまを拝み、そして祈る。

さらにはもっと身近に仏さまを觀じ祈るときもある。この小学生は私にとってまさに生き仏であり、私の心の中の仏心と呼び起こしてくれた仏さまである。また、道端にひっそりと咲いている一輪の花にも仏を觀じて手を合わせる方もいるだろう。

祈る仏とは自分の仏心を共鳴させてくれる存在ではないだろうか。

二つ目の要素は祈るという行為である。何を祈るのか、何のために祈るのか？ 祈りと願いとはどこが違うのか？

「いのり」という語源は、「い」（息）と「のり」（宣）であるといわれ、息の言葉、すなわち「いのちの言葉」である。人は息をしなければ生きていくことはできない。生きているものにしかできない行為であり、生きていれば誰にでもできる行為なのである。いのちの底から湧いてくる言葉、すなわち今生きているという自覚、生きるという人間が唯一持つ本性の行為であろう。

この息、呼吸とは不思議なものである。我々の体は、食べたり、歩いたり、物をつかんだり意識して動かす神経（体性神経）と、心臓、消化管、呼吸など意識しなくても動く神経（自律神経）の支配を受ける。その中で呼吸は体性神経と自律神経の両方の支配を受けることができる運動なのである。意識して心臓を止めることは不可能であるが、呼吸は意識して止めることも吸うこともできるのである。

さらに自律神経は交感神経と副交感神経とに分かれ、交感神経とは体を活発に活動させる時に働く神経であり脈拍、血圧を高める。副交感神経とは体をゆったりとさせるときに働く神経であり消化管、睡眠などの支配をする。呼吸では吸気は交感神経支配、呼気は副交感神経支配による。したがって、吸気よりも呼気を意識してなるべく時間をかけて息を吐き出す呼吸法により心は落ち着く（数息觀、阿息觀）。全身の不浄の空気をはき出し、清浄なる空気を全身に送り込む。全身とは60兆という仏心を持つ一つ一つの細胞の集合体である。

仏さまに祈るとは、諸々の願いを仏さまにすがるものではなく、仏さまに出会うことにより、この60兆という細胞内の仏心が共鳴、鼓舞し、清浄なるいのちの根源を自覚し共感することなのである。

合掌

「仏さまに祈る」

智山教化センター専門員 吉田 住心

富士山を始め恐山、御嶽山など日本の名山と呼ばれる高山の上には大抵「賽の河原」と呼ばれる地名があります。いずれも樹木が生えない森林限界で、石がゴロゴロと転がっている荒涼とした場所です。賽の河原といえば三途の川の此方側の端で、地蔵和讃では嬰兒の魂がそこで足止めをくい、獄卒に追い立てられ、寒風の吹きすさぶ中、裸同然の格好で父恋し母恋しと嘆きながら小石を拾って父母の供養塔を作らされる悲しい場所として描かれますが、これらの高山の賽の河原にも堆い石積みが見られます。これらはかつて子を亡くした親たちが涙を流しながら地蔵和讃に倣い、子どもの供養のために積んだ石積みの名残なのでしょう。

空也上人の作ともいわれるこの地蔵和讃ですが、子を亡くした親にとっては余りにも酷な和讃ですし、また高山で石積みをして供養をするという方法も非常に厳しいものがあるように思えます。なぜ子を亡くした親たちはこれほど辛い供養をしなければならなかったのでしょうか。

よくよくこの和讃を咀嚼すると、仏教の教えとして非常に大切なことが説かれていることに気づきます。一つは鬼たちが子どもを追い立てながら「親の嘆きは汝らの 責め苦を受くる種となる」という場面です。現世に残していった親の慟哭がそっくりそのまま賽の河原での子どもたちの責め苦になってしまっているという表現を逆に解釈すれば、賽の河原での子どもたちの地獄の中のような苦しみこそ、子を亡くした親たちの苦しみそのものであるということを表しているのでしょう。

また地蔵菩薩が最後に現れて、子どもらに「一度冥土の客人になったからには、どんなにそれを望もうとも悲しいかな二度と娑婆の世界に帰ることは叶わない」と諭す場面は、現世の父母の元に帰りたいという執着こそが子どもたちの苦しみの最大の原因であると同時に、子どもを取り戻したいという強い思いこそが、親たち自身の悲しみの最大の原因なのだということを表しているのです。

しかしこれらの因果はいくら口で説明しても、子どもを亡くしてしまった親にとっては簡単に得心いくものでは決まてないでしょう。だからこそ、これほど悲しい和讃があり、また高山に登り子どものために石を積むという厳しい修行の中で、子どもを取り返すのではなく、子どもの冥福を祈る心を自ら培っていく供養の方法が確立していったのではないのでしょうか。

和讃の最後には地蔵菩薩が、これからは自分を冥土の父母だと思い、私の元にいらっしゃい子どもらの霊を抱き上げ、三途の川を越え西方極楽浄土へ連れていく場面があり、「子を先立てし人々は 悲しく思えば西へ行き 残る我が身も今しばし 命の終わるその時は 同じ蓮のうてなにて 導きたまへ地蔵尊」と結びます。これこそ子どもの冥福を祈り、またいつかは自分もそこに行く、そのためには地蔵菩薩に帰依をし、子どもの行末の一切をお任せすることこそが何よりも両親の苦患を救う手立てであり、後世に子どもの元へ導いていただくという両親の帰依と安心によって子どもの靈魂も救われるということを説いているのでしょう。

合掌

VII その他

1. 宗内寺院・教会刊行物 寄贈図書・資料

【宗内寺院・教会定期刊行物】

刊行物	寄贈者名	備考
岩槻大師	弥勒密寺 岩槻大師	埼玉第4教区 寺籍1番
川崎大師だより	大本山川崎大師平間寺	神奈川教区 寺籍1番
お大師さまとともに	大本山川崎大師平間寺	神奈川教区 寺籍1番
桔梗通信	興性寺	岩手教区 寺籍31番
くすのかおり	岩間山 東漸寺	九州教区 寺籍21番
千の手	寂光院	東海教区 寺籍35番
高尾山報	大本山高尾山薬王院	東京多摩教区 寺籍1番
高尾山御寶暦	大本山高尾山薬王院	東京多摩教区 寺籍1番
高幡不動尊	別格本山高幡山金剛寺	東京多摩教区 寺籍2番
智光	大本山成田山新勝寺	下総印旛教区 寺籍1番
微笑	岩手教区布教師会	岩手教区布教師会
宝蓮寺通信	宝蓮寺	栃木南部教区 寺籍26番
法燈	東覚寺	東京東部教区 寺籍28番
まんだら通信	天神山紫雲寺	安房第2教区 寺籍35番
ボサツの声	延命院	東京西部教区 寺籍5番

【宗内寺院・教会刊行物(含、宗内寺院関係寄贈分)】

刊行物	発行所	寄贈者名
智泉	栃木智山青年会	栃木智山青年会
神奈川教区寺庭婦人会二十周年記念誌	神奈川教区寺庭婦人会	神奈川教区寺庭婦人会
南山城の古寺巡礼	京都国立博物館 朝日新聞社	京阪教区 海住山寺 佐脇貞憲
古寺巡礼 京都南山城の仏たち	京都 南山城古寺の会	京阪教区 海住山寺 佐脇貞憲
びっばら	全国青少年教化協議会	東京西部教区 延命院 渡邊照敬
智山伝法院選書 15,17	智山伝法院	智山伝法院
密厳流和讃解説書	密厳教会遍照講総本部	密厳流遍照講
鬼来迎(DVD)	桜映画社	下総印旛教区 寛藏院中 橋浦寛能
入門 般若心経	株式会社洋泉社	長野南部教区 照光寺中 牧宥恵
真言宗智山派勤行聖典 復刻版	致航山 満願寺	東京東部教区 東覚寺中 小宮俊海
『三十帖策子』と真言密教教化の基礎的研究	善養寺	東京西部教区 善養寺 真保龍敬
十三仏と追善供養	四季社	長野南部教区 照光寺 宮坂宥洪
中法人会だより[なか]	公益社団法人 名古屋中法人会	東海教区 寂光院 松平實胤
四度次第	総本山智積院	真言宗智山派宗務庁
根来寺を解く	朝日新聞出版	長野南部教区 照光寺中 牧宥恵
大法輪	大法輪閣	東海教区 寂光院 松平實胤
智山年表[近世篇]	真言宗智山派宗務庁	真言宗智山派宗務庁

【他宗派定期刊行物】

刊行物	寄贈者名
月刊「池上」	池上本門寺
アンジャリ	親鸞仏教センター
親鸞仏教センター通信	親鸞仏教センター
へんじょう	総本山善通寺
ちくまん	大本山 大覚寺
花園	妙心寺派教化センター
正法輪	妙心寺派宗務庁

【他宗派刊行物】

刊行物	発行	寄贈者名
現代と親鸞 第28・29号	親鸞仏教センター	親鸞仏教センター
浄土学 第51輯	浄土学研究会	浄土学研究会
縁の手帖 つながりの中に生き往くために	浄土宗	浄土宗総合研究所
縁JOYおてら	公益財団法人 浄土宗ともいき財団	浄土宗ともいき財団

【関係機関・団体定期刊行物】

刊行物	寄贈者名
びっばら	全国青少年教化協議会
全仏	全日本仏教会
ナム	南無の会
仏教情報誌ムディター	溝辺了
りす倶楽部	りす倶楽部事務局
BSR通信	大正大学BSR推進室

【大学・関係機関・関係者】

刊行物	発行	寄贈者名
死生学・応用倫理研究 第19、20号	東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター	東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター
逸見梅栄コレクション画像資料 3	アジア図像集成研究会	金沢大学文学部 森 雅秀
高野山大学密教文化研究所紀要 第27号	高野山大学密教文化研究所	高野山大学密教文化研究所
佛教文化論集 第11号	大本山川崎大師平間寺	大本山川崎大師平間寺
『東草集』訳註研究 第2巻	大本山川崎大師平間寺	大本山川崎大師平間寺
KHAJURAHO	アジア図像集成研究会	金沢大学文学部 森 雅秀
Fukujin 17号	明月堂書店	福神研究所
法と宗教をめぐる現代的諸問題(6) 紀要第55号	愛知学院大学宗教法制研究所	愛知学院大学

2. 購入図書

【一般図書】

書籍名	著者・編集者名	発行所
日本の護符文化	千々和 到	弘文堂
曹洞宗三尊佛	曹洞宗	曹洞宗
十三仏信仰	渡辺章悟	溪水社
十三仏由来	廣安恭壽	文政堂
ソナエ	赤堀正卓	産経新聞社
子どものからだと心白書	子どものからだと心・連絡会議	株式会社平河工業社
新しい社会歴史		東京書籍
社会科 中学の歴史		帝国書院
中学社会 歴史		教育出版

【雑誌・新聞】

書名
大法輪
月刊住職
文化時報
高野山寺報
六大新報
中外日報
仏教タイムス

智山教化センターの役割と活動

智山教化センターは、真言宗智山派教化規程第二条「本宗の教化活動を効果あらしめるために、智山教化センターを設置する」の規定に基づき、真言宗智山派の教化を推進し、実動させるサポート機関です。

主な活動としては、

- ①教化推進施策として真言宗智山派が掲げる「教化目標」「教化年次テーマ」の策定。
- ②真言宗智山派で主催するさまざまな研修会の企画・立案と運営協力。また、教区で主催する「教区教化研究会」「檀信徒教化推進会議」などの開催協力。
- ③教師・寺庭婦人を対象とした教化情報誌の企画・編集。檀信徒に真言宗智山派の教えや「教化目標」「教化年次テーマ」を知っていただくための教化誌の企画・編集。
- ④宗教文化全般、宗内寺院や他宗派の教化活動に関する情報収集や調査研究。

などを行っています。

■ 智山教化センター構成員(平成26年4月～平成27年3月)

役職名	氏 名	就任年月日	教 区	寺院名
センター長	片 野 真 省	H21.4.1	埼玉第 1	吉祥院
常 勤 所 員	小 山 龍 雅	H10.4.1	東京西部	寶生院
	高 岡 邦 祐	H13.4.1	埼玉第 5	寶性院
	山 川 弘 巳	H16.4.1	東京南部	圓應寺
	倉 松 隆 嗣	H21.4.1	栃木南部	観照院
	鈴 木 芳 謙	H21.12.1	東京東部	香華院
	松 平 實 心	H25.4.1	東海	寂光院中
	元 山 憲 寿	H25.4.1	埼玉第 1	寶巖院中
非常勤所員	佐 藤 英 順	H20.8.1	埼玉第 11	長榮寺
	磯 山 正 邦	H21.4.1	東京東部	正福寺中
	川 口 美 保	H25.4.1	栃木北部	密乗院
専 門 員	佐 脇 貞 憲	H15.4.1	京 阪	海住山寺
	北 尾 隆 心	H 9.4.1	京 阪	最勝寺
	牧 宥 恵	H11.4.1	長野南部	照光寺中
	高 野 智 哉	H17.4.1	佐 渡	寶藏寺
	佐 藤 雅 晴	H13.4.1	宮 城	岩誓寺
	倉 松 俊 弘	H17.4.1	栃木南部	薬王寺
	吉 田 住 心	H24.9.1	埼玉第 9	地藏院
	吉 岡 光 雲	H22.10.1	東京北部	観音寺
	原 豊 壽	H25.4.1	東京多摩	福傳寺
	松 平 實 胤	H15.4.1	東海	寂光院
主 事 補	小 泉 暁 輝	H25.4.1	埼玉第 1	普門寺
書 記	小 暮 祐 介	H25.4.1	上総第 4	薬王寺中
	村 磯 頼 裕	H22.4.1	東京東部	善福院中
雇 員	福 崎 実 穂	H25.4.1		

年 報 第19号 (平成26年度)

平成27年6月1日 発行

発行人 真言宗智山派宗務総長 小宮 一雄

編 集 智山教化センター

発行所 〒605-0951

京都市東山区東山大路七条下ル東瓦町964

総本山智積院内 真言宗智山派宗務庁

電 話 075-541-5361(代表)

FAX 075-541-5364

印刷所 株式会社ディー・エイ・ティ・コーポレーション